

K-239

觀音堂遺跡

山形市芸工大前土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

2004

山形市芸工大前土地区画整理組合
山形市教育委員会

觀音堂遺跡

山形市芸工大前土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

平成16年3月

山形市芸工大前土地区画整理組合
山形市教育委員会



観音堂遺跡周辺（遺跡はマル内）

序

本報告書は、平成12年に実施した、観音堂遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

観音堂遺跡は、山形市芸工大前土地区画整理事業に係わり平成11年度に新規発見された遺跡で、調査の結果近世を主体とする掘立柱建物跡3棟が発見され、当時の生活をものがあたる貴重な資料を得ることができました。

山形市内には、国指定史跡「鳩遺跡」や「山形城跡」をはじめ、約300箇所の遺跡が確認されています。これらの遺跡は、山形市の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。

近年は市内各所において開発事業が増加しており、それに係わり埋蔵文化財の保護を目的とした発掘調査に至る事例が多くなっています。観音堂遺跡の発掘調査は、芸工大前土地区画整理事業との調整の上で、遺跡の記録保存を目的として行われました。

本書が、埋蔵文化財の保護と啓蒙のため、そして皆様の地域史探究の一助としてご活用いただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、調査に当たって埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき、発掘調査に多大なご協力をいただきました事業者や工事関係者の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

山形市教育委員会

教育長 大 場

登

本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の位置	3
第2節 自然環境	3
第3節 歴史的環境	8
第3章 発掘調査と整理の方法	
第1節 発掘調査の方法	10
第2節 整理の方法	12
第3節 遺跡周辺の地形と層序	13
第4章 検出遺構・遺物	
第1節 検出された遺構	15
第2節 出土遺物	31
第5章 まとめ	35
抄録	38

挿図目次

第1図 工事予定区域図	2
第2図 遺跡位置図	4
第3図 調査区周辺図	6
第4図 地質区分図	7
第5図 遺跡周辺旧地形図	9
第6図 グリッド配置図	11
第7図 遺跡層序柱状図・IV層エレベーション図	14
第8図 観音堂遺跡遺構配置図(別添)	
第9図 遺構平面図・横断図(1)	17
第10図 遺構平面図・横断図(2)	18
第11図 掘立柱建物跡・柱穴断面図(1)	19
第12図 掘立柱建物跡・柱穴断面図(2)	20
第13図 遺構平面図・断面図(3)	22
第14図 遺構平面図・断面図(4)	25
第15図 遺構平面図・断面図(5)	26
第16図 遺構平面図・断面図(6)	27
第17図 遺構平面図・断面図(7)	28

第18図 遺構平面図・断面図（8）	29
第19図 遺構平面図・断面図（9）	30
第20図 遺構内出土遺物実測図	33
第21図 遺構外出土遺物実測図	34

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	5
第2表 出土遺物一覧表	32
第3表 遺構一覧表	37

図 版 目 次

図版（口絵） 観音堂遺跡周辺	
図版1 調査区全体	
図版2 調査区全景（西から）、調査区全景（南から）	
図版3 SB01全景、SB148・155全景	
図版4 SD02完掘状況、SD02断面写真	
図版5 遺跡位置遠景、表土掘削前状況、SB01検出状況、調査区傾斜状況及び層序、調査区断面調査状況、SB01EP1断面、SB01EP4断面	
図版6 SB148EP2・SK14断面、SB148EP2断面、SB148EP1・SK11断面、SB148EP1 礎盤縛、SB148EP1・EP2、SB148EP3・EP4、SB148EP4・EP5、SB148EP5・ SK23断面	
図版7 SB155EP1断面、SB155EP3断面、SB155EP2断面、SB155EP2断面拡大、SB155EP5 断面、SB155EP6断面、調査状況	
図版8 SK14断面、SK43断面、SP59断面、SK61断面、SK16断面、SK04調査状況、SP22 断面、SK07断面	
図版9 遺物（1）	
図版10 遺物（2）	

例　　言

1 本書は山形市芸工大前土地区画整理事業地内の街区道路建設事業に係わる「観音堂遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は山形市芸工大前土地区画整理組合の依頼により、山形市教育委員会が実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺　　跡　　名　観音堂遺跡

所　　在　　地　山形県山形市大字青田

調査事業の主体　山形市芸工大前土地区画整理事業組合

調査実施の機関　山形市教育委員会

調　　査　　期　　間　現地調査 平成12年5月15日～平成12年6月23日

(整理作業・報告書作成期間) 平成15年8月4～29日 平成16年1月5日～3月31日

調　　査　　担　　当　者　山形市教育委員会文化課(平成12年度) 社会教育課(平成15年度)

課　　長　石澤孝一郎

課　　長　伊藤　邦男

課　長　補　佐　工藤　義夫

課　長　補　佐　江川　隆

文化財係係長　江川　隆

文化財保護係係長　小野　徹

文化財係主任　五十嵐貴久

文化財保護係主任　五十嵐貴久

臨時職員　高橋　拓

臨時職員　高橋　拓

4 本書の執筆・編集は五十嵐貴久が担当した。

5 発掘調査及び整理作業にあたり、下記の方々から協力を頂いた。(敬称略・順不同)

現地調査 阿部巳代治、伊藤哲郎、小形満、加藤君子、金子みつの、黒田富雄、小関和子、後藤義一郎、丹野一郎、長岡玲子、原田とし子、町田雅樹、松沢アイ、結城しのぶ

整理作業 関野信子、中澤林子、結城しのぶ

6 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形市芸工大前土地区画整理事業組合、渋谷建設株式会社等の関係諸機関の協力を得た。記して感謝申し上げる。

7 本遺跡の内容は、一部が現地説明会資料等にて公開されているが、本書の内容がそれらに優先する。

8 出土遺物・調査記録類については、山形市教育委員会社会教育課が一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構の略称等は以下の通りである。

SB：掘立柱建物跡 EP：柱穴(掘立柱建物跡) SD：溝跡 SK：土坑・柱穴 SP：小穴

2 遺構番号は現地調査段階に付したものそのまま報告書の番号として踏襲した。同様に現地にて欠番のものは欠番のままとなっている。

3 図中に示した方位は真北を示している。

4 遺構実測図は各々1/40～1/500の縮図で採録し、各々スケールを付した。

5 遺物実測図は1/2の縮図で採録し、各々スケールを付した。

6 遺構の寸法基準は次の通りとする。1間=1.818m、1尺=30.3cm、1寸=3.03cm。

7 遺構フク土の色調については『新版標準土色帳』1987に掲載した。

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1図）

観音堂遺跡は、山形市青田地内に所在し、平成11年度に新規発見された遺跡である。青田・中桜田・上桜田地内における土地区画整理事業が山形市芸工大前土地区画整理組合によって実施されることとなり、平成10年度に山形市教育委員会では埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は無かったが、事業面積が広大であることなどから同地内において試掘調査を実施することとなった。試掘調査は現地が水田及び果樹畠等であることから農繁期を避け、平成11年3月15～26日まで延べ10日間行った。試掘坑は300箇所設定し、延べ300m²の範囲において埋蔵文化財の分布状況を確認した。その結果、当該遺跡の発見に至った。

これらの調査結果を踏まえ、県教育委員会あて新規遺跡発見の届出を行うとともに、関係機関により埋蔵文化財の取扱について協議を行った結果、遺跡が発見された事業予定地について、工事に先立ち緊急発掘調査を実施し、記録による保存を図る運びとなった。

調査の実施にあたっては、開発行為の申請者である山形市芸工大前土地区画整理組合と山形市教育委員会の間で調査に関する協定を結び、市教育委員会が調査を実施することとなった。現地調査は平成12年5月16日～6月23日まで延べ26日間実施した。

また、事業者と市教育委員会で協議を行った結果、整理作業及び報告書作成業務の実施にあたり両者で新たに協定を結び、市教育委員会がこれを行った。整理作業は平成15年8月4日～平成16年3月31日までのうち延べ35日間実施した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査の経過は次の通りである。5月16日・17日に重機を使用して表土を掘削し、それと並行して5月17日に発掘器材の搬入及び環境整備を行った。調査区内は表土直下より礫が多量に出土し、重機作業によって移動した礫も多数存在した。遺構確認面精査を5月17日より4日間行い、同時に調査区北壁を精査し基本層序の確認を行った。面精査のうち遺構のマーキングを行ったが、前記したように人頭大の礫の移動を伴う表土除去であったために、礫の抜けた穴を遺構と誤認する可能性が高いことが予測されたために、マークした遺構はおよそ2cm面的に掘り下げて確実な遺構の確認及び遺構同士の重複関係を把握することに努めた。5月22日より遺構登録を開始し、遺構精査に取りかかった。遺構登録は遺構種別の略称を付して、そのあとに連番で番号を組み合わせて名称とし、台帳に登録するとともに現地遺構に標記した。遺構は、任意に半割して断面写真撮影を行い、その後断面図を作成した。その際に遺構の重複などの場合、前後関係を確認しうる位置に断面を設定するよう努めた。断面図完成後は全掘作業を行い、完掘状況の写真撮影・平面図作成等を行った。写真撮影は35mmカメラにて対応し、記録はすべてカラーリバーサルフィルムを用いた。6月9日には調査区基準杭を設置した。

現地は傾斜地であるため、正確性を期するため作業は業者委託した。また、現場作業の省力化及び期間短縮を兼ねて航空写真測量を実施し、6月20日にラジコンヘリコプターによる撮影を実施した。この際に上空からの遺跡調査区俯瞰写真撮影も行った。6月23日には、現地説明会を実施し約30名の参加者を得て、同日に器材撤収し現場調査を終了した。



第1図 工事予定区域図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置（第2～3図）

観音堂遺跡は山形県山形市に所在する。山形市は東京より直線距離にて北北東約300kmの距離にあり、市庁舎において北緯38°15'、東経140°21'を測る。面積は381.58km²である。奥羽山系をはさんで東部に宮城県仙台市に隣接し、北部を天童市、西部を東村山郡山辺町・中山町・西置賜郡白鷹町、南部を上山市・南陽市に接する人口約25万人の県庁所在地である。山形県内陸部にあり、南北約40km、東西約10kmの南北に細長い舟底形の山形盆地東部に位置する。山形市街地は東部の奥羽山系に端を発する馬見ヶ崎川を中心とした大小河川による複合扇状地上にあり、盆地西部を北流する須川に向かい傾斜する地形上に都市を発達させている。

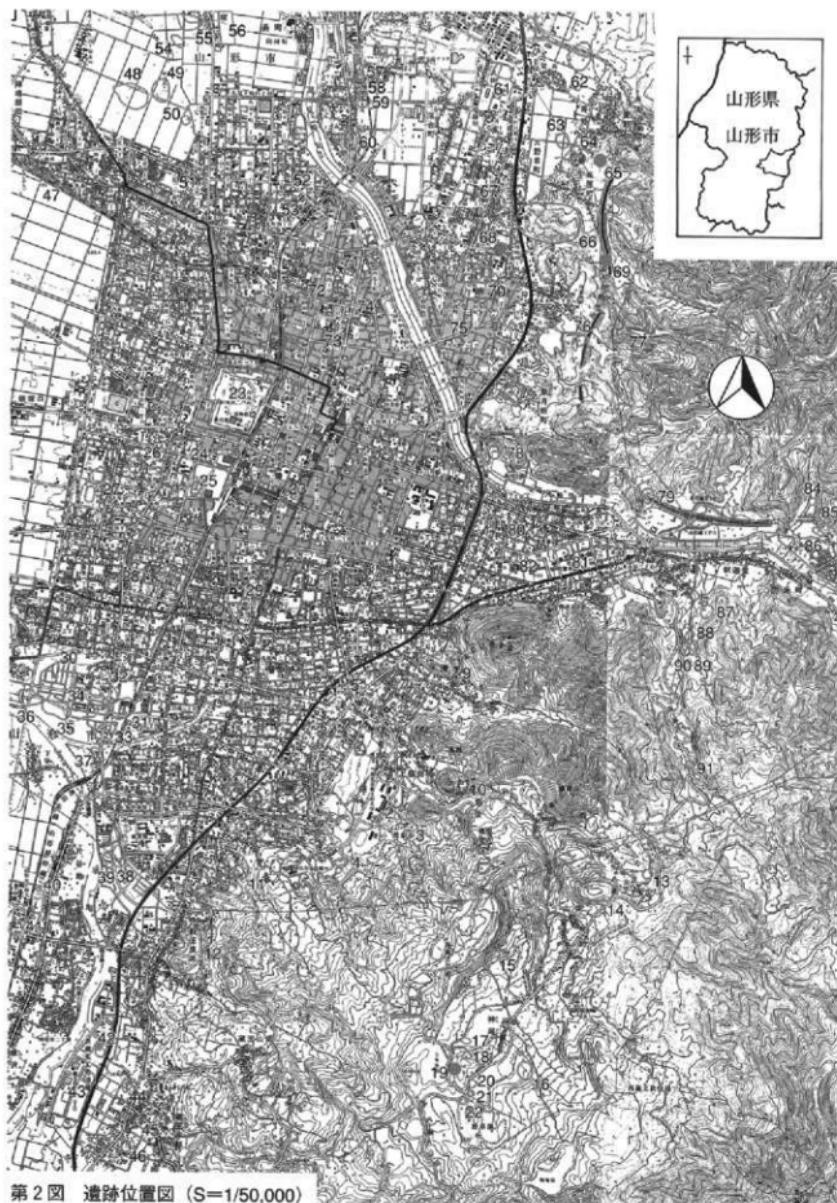
本遺跡は山形市の南東部、市街地から約3km離れた山形市青田地内に所在する。同地域は龍山川により発達した扇状地の扇央部にあたり、遺跡は現在の龍山川流路より約30m南に位置する。遺跡範囲は東西最大150m・南北最大90mの不定形横幅に広がり、標高は約171mから181mの比高差約10mをはかる東高西低の地形上にある。

第2節 自然環境（第4図）

1 周辺の自然環境

山形市は東部に奥羽山系（面白山・雁戸山・藏王山）、西部と南部に白鷹丘陵地帯が裾野を広げており周囲を山に囲まれた典型的な盆地である。青田地区は藏王山系のひとつ瀧山（標高約1,362m）の山麓部にあたり、扇状地は遺跡北東約1kmの岩波より発し、上桜田・青田・小立て扇央帯を形成し元木周辺が扇端部に相当する。扇頂部の岩波より東部は急峻な山地形となり瀧山の前山を形成し、スギを主体とする2次林が広がる。その山上には神尾の小盆地がある。瀧山火山による泥流堆積物によって形成された盆地には湖沼が点在し、下流する河川の水源の一つとなっているほか、ミズバショウ・ザゼンソウ等高山性の植物を示す貴重な存在である。その周囲に広がる山岳地帯は藏王国定公園であり山林・動植物始め自然環境が保全されている。また、同地域は国指定天然記念物ニホンカモシカの生息域にもあたり近年環境の変化に伴い里山付近まで捕食のため降りてくるため、食害の問題が指摘されている。同じく県指定・市指定の天然記念物であるヒイラギ・スギ・サクラ・イチョウ等の老木が平清水・藏王半郷などに分布し里山地区の景観と一体として保全されている。龍山川は藏王連山に端を発する河川（犬川・鳴沢川・坂巻川・熊野川・松尾川・酢川）の一つで藏王水系に属する。神尾小盆地を通り、土坂・八森等の周辺小集落・現市街地間を貫流して市内吉原にて須川に合流する。須川は市北部の天童市に接するあたりで県内を貫流する最上川に合流する。

周辺の地域は、北部は市内平清水より発する恥川（犬川）、南部は中桜田より発する坂巻川・馬立川などにより同様の扇状地が形成されており、かつ流路周辺は沢地形で深い開析谷が形成されている。そのなかで、龍山川流域は扇頂部（岩波）と扇端部（元木）で比高差約130mがあり、約3.5/100(m)という急傾斜であることが窺える。土地利用については、周辺は從来棚田が形成されてきた田園地帯である。一部には葡萄・桜桃果樹園が存在するが田園中に点在するのみで、瀧山の前山中腹地帯の急傾斜地になると果樹園が広がりをみせる。龍山川流域の谷地は狭小地ではあるが耕作田が存在し神尾集落へと続いている。



第2図 遺跡位置図 ($S=1/50,000$)

遺跡周辺は行政区画として滝山地区と称するが、明治22（1889）年の市町村制以降の名称である旧「滝山村」に由来し、昭和29（1954）年に山形市に編入している。その後市街地の拡大に際して徐々に区画整理等が行われ周辺環境も著しく変化してきた。さらに、近年上桜田に東北芸術工科大学が開校したほか、県による「悠創の丘」整備事業、市による「西藏王公園」整備事業の着手などの観光・レクリエーション振興事業によって景観等も含めた環境の変化が著しく進んでいる地域である。

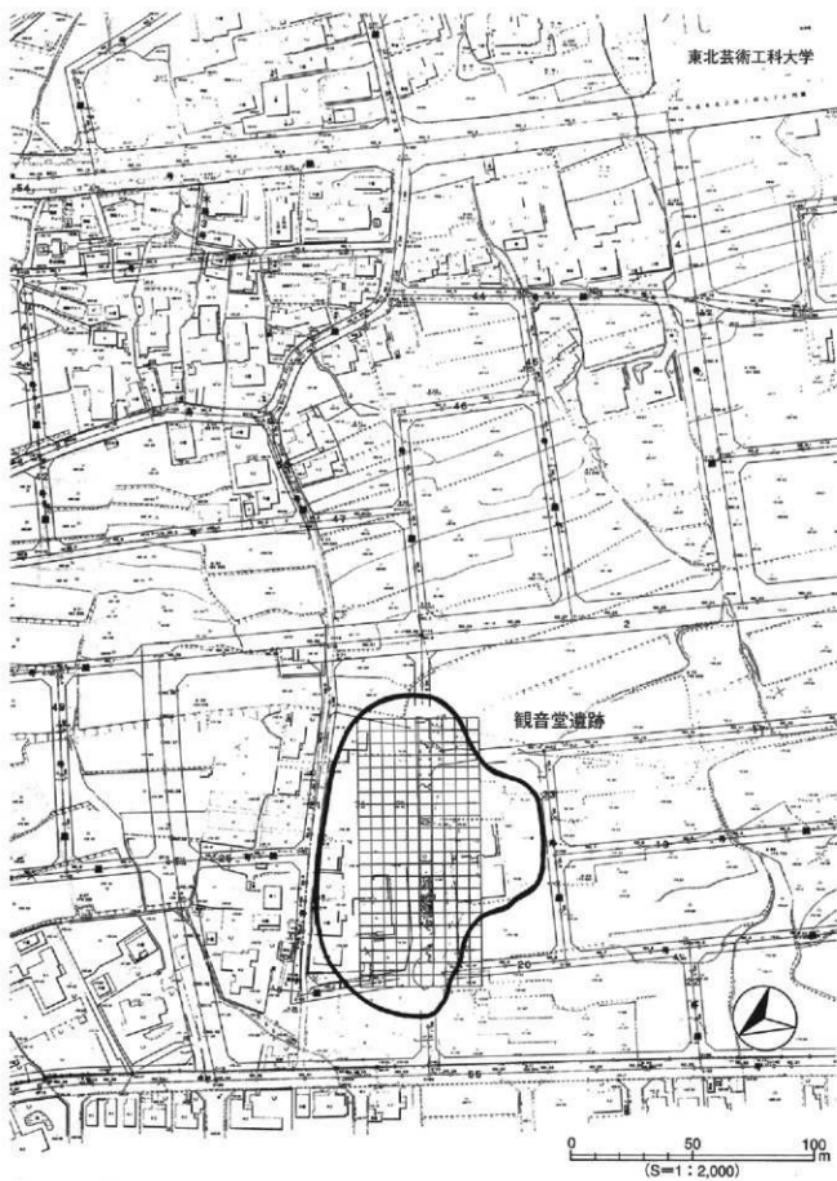
2 地形と地質

山形市は市域の約67%が山地・丘陵地帯である。観音堂遺跡の所在する青田・上桜田両地区は地形分類上低位の桜田段丘と呼ばれている部分が最も多く、約1万年以降の完新世に形成された地形である（米地・阿子島1982）。龍山川・坂巻川をはさみ前田・元木地区は扇状地前縁部に、中桜田地区は扇状地に区分されている。いずれも龍山川等の藏王（龍山）水系の大小河川により形成された地形である。

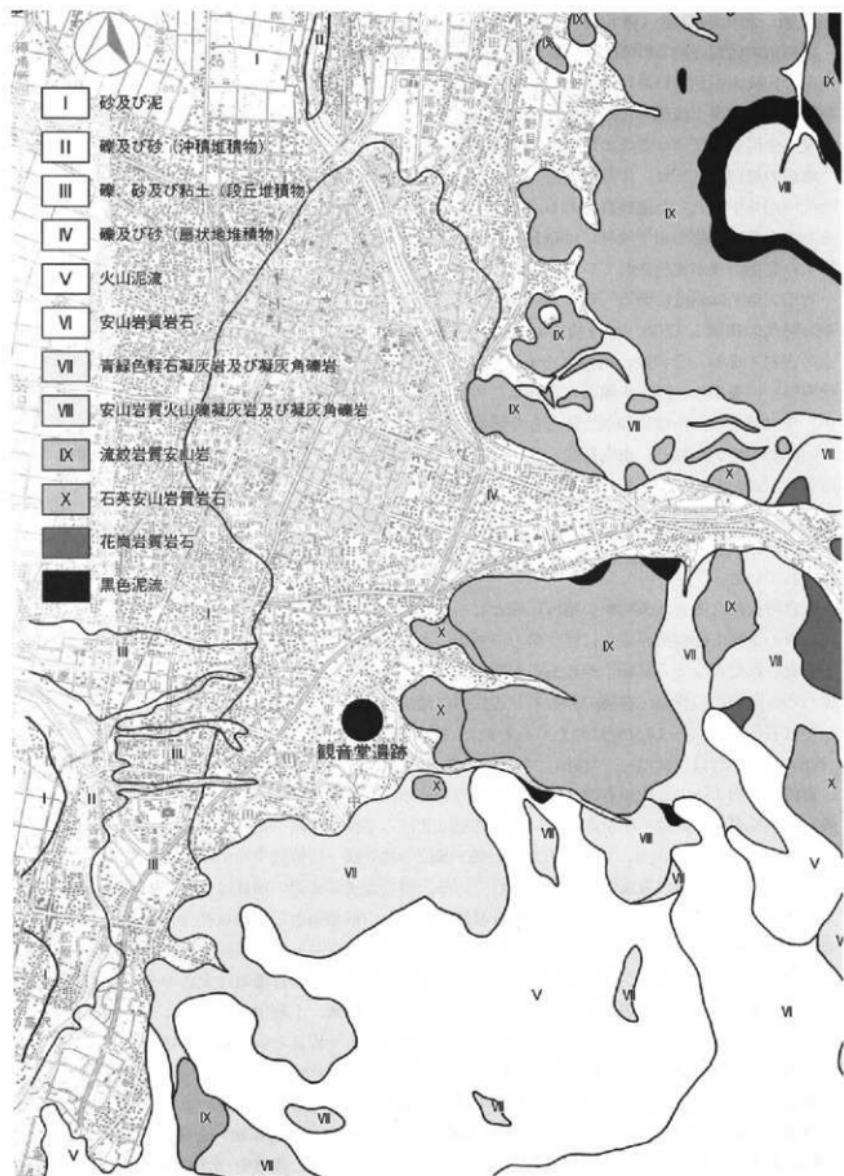
一方、遺跡周辺を覆う表層地質は、礫及び砂を主体とする扇状地堆積物により形成されており、馬見ヶ崎扇状地帯より瀧山山麓一帯に広く分布する。その周囲は、上桜田・中桜田の前山部分は成沢里層とよぶ軽石凝灰岩・凝灰角礫岩を主体とし、龍山川右岸の戸神山・千歳山等の山麓丘陵地帯は各々石英安山岩質岩石・流紋岩質岩石など地質時代にさかのばる岩石を主体とする地質となる。

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	観音堂遺跡	20	神尾C遺跡	39	成沢西遺跡	58	長町遺跡	77	大網遺跡
2	木戸遺跡	21	神尾D遺跡	40	片谷地遺跡	59	西ノ神遺跡	78	小白川向山遺跡
3	石コロ遺跡	22	神尾E遺跡	41	横手区遺跡	60	落合橋跡	79	西の沢遺跡
4	中桜田遺跡	23	史跡 山形城跡	42	戸刈田遺跡	61	浜田橋跡	80	金谷館跡
5	永大ハウス裏遺跡	24	城南町一丁目遺跡	43	西の宮遺跡	62	お花山古墳群	81	熊の前遺跡
6	松見町遺跡	25	双葉町遺跡	44	鳴沢川遺跡	63	砂田遺跡	82	三浦屋敷
7	青田遺跡	26	長苗代条里遺跡	45	藤木遺跡	64	高原遺跡	83	松山遺跡
8	荒橋跡	27	五日町遺跡	46	半郷遺跡	65	小山遺跡	84	境谷沢遺跡
9	平清水館跡	28	南館跡	47	高崎山遺跡	66	山家橋跡	85	びどろB遺跡
10	岩波館跡	29	山形西校敷地内遺跡	48	梅ノ木前1遺跡	67	大野目遺跡	86	びどろA遺跡
11	飯田館跡	30	吉原VI遺跡	49	史跡 鳥遺跡	68	上山家遺跡	87	积迦堂裏遺跡
12	成沢城跡	31	吉原II遺跡	50	田端福荷塚遺跡	69	高原上ノ原古墳	88	妙見寺A遺跡
13	八森遺跡	32	吉原V遺跡	51	江根遺跡	70	内城跡	89	千葉屋敷
14	桶山橋跡	33	吉原III遺跡	52	検葉ノ木遺跡	71	宮町円応寺遺跡	90	妙見寺B遺跡
15	荻の庫遺跡	34	吉原IV遺跡	53	川原田遺跡	72	西根小但島屋敷跡	91	妙見寺C遺跡
16	神尾遺跡	35	吉原I遺跡	54	河原田遺跡	73	宮町三小遺跡		
17	神尾B遺跡	36	若宮の橋跡	55	今塚遺跡	74	薬師町五中遺跡		
18	神尾A遺跡	37	吉原VII遺跡	56	今塚橋跡	75	飯田遺跡		
19	三本木窓跡	38	泉出城跡	57	長町北河原遺跡	76	にひゃく寺遺跡		

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 調査区周辺図

第4図 地質区分図 ($S=1/50,000$)

第3節 歴史的環境（第5図）

山形市内は現在約300箇所の遺跡が周知されている。観音堂遺跡の所在する滝山地区及び山形市東南部の丘陵山岳地帯においては遺跡の分布密度は濃くはない。これは、周辺環境によるものと解釈されるが、龍山川上流部の神尾小盆地においても先史・古代の遺跡が確認されていることから、周辺は人々の生活領域であったことは明らかで、今後も新規の遺跡の発見が考えられる。

周辺の遺跡としては、中桜田遺跡（第2図4）・松見町遺跡（同6）・青田遺跡（同7）などが縄文時代中期を中心とした遺跡群である。龍山川及び坂巻川流域に分布し扇尖部よりや下流域に位置するものが多い。龍山川下流域には奈良・平安時代を中心とした吉原遺跡群が所在し山形市教育委員会により発掘調査が実施されている（山形市教育委員会2001a・2001b・2002a・2003a・2004）。

青田の地名は岩波にある「石行寺」の古写經に「栗生田」とも書かれた古い地名である。石行寺は奈良時代の和銅1（708）年行基により開基され、慈覚大師円仁によって中興された由緒を持つ天台宗の古刹である。その後、貞觀9（867）年には最上郡靈山寺が定額寺に列せられる記事が『日本三代實錄』に登場し、瀧山山麓部に存在した可能性が指摘されている。これら宗教史的事例は靈山（瀧山）を対象とした山岳信仰が主体となり形成された「龍山信仰」とも関連し、滝山地区において石塔等記念物や地名が残る。市内鳥居ヶ丘・藏王成沢に凝灰岩からなる石鳥居（国指定重要文化財：平安時代）がこの頃の遺構として現存し、瀧山に向けての登拝口に建立するものと考えられている。この頃の遺跡として注目すべきものは西藏王三本木湖沼畔にある平安時代の三本木塚跡群である（第2図19）。また、神尾盆地には神尾B（第2図17）・C（同20）・D（同21）と奈良・平安時代の遺跡が確認されている。

鎌倉時代になると北条時頼の廻国伝説とともに靈場瀧山の閉山説が伝えられている。これらは13世紀以降の土地支配機構の変化に伴う勢力の減退によるものと考えられているが、記念物等はそれ以後も建立されたようで「信仰」そのものが断絶したものではないと推定されている。この頃閉山記事に係わる寺院僧坊の移転・移築の話もあり古代的な僧坊等は姿を消したものと考えられている。史料としては石行寺に13~14世紀にわたり行われた「大般若經（県指定有形文化財）」が現存し、「栗生田（青田）」・「北蔵田（前田）」・「桜田」を冠する領主層の所在が判明している。

遺跡北東約1kmの龍山川右岸には戦国時代の岩波館跡（第2図10）がある。前出石行寺の裏山に位置し、築城者等詳細は不明である。同様の城館は北から平清水館跡（第2図9）・飯田館跡（同11）・成沢城跡（同12）があり、いずれも舌状丘陵・低位の独立嶺上に位置する山城である。いずれも水利の便が良くかつ交通の要衝の地に配置されている。観音堂遺跡周辺の地域は位置関係より岩波館の勢力圏に含まれた可能性が考えられる。近世幕藩制のもと山形藩領として地域社会が安定するとともに、郷村の姿が明らかになってくる。寛永13（1636）年に山形城主となる保科正之の領地目録に『上桜田・中桜田・青田』とある。江戸中期には度重なる城主交替により山形藩領は大名の飛領地支配となり、遺跡所在地の青田及び周辺の中桜田・小立等は佐倉藩堀田氏領、上桜田は幕領へと支配権が移行する。

現存する古跡・古建築では、遺跡北方約50mに社があり千手観音と馬頭観音が祀られている。伝承によるとこの社の東方に亀鶴庵という寺院があったが火災により焼失した旨を伝えている。社殿前にては享保4（1719）から万延1（1860）年代の建立時期差をもつ石塔群がある。またこの社の隣接地にて将軍塚の伝承もあるという。そのほか、遺跡北方約200mには「青田沼」と呼ぶ灌漑用池があり、記録によると明和7（1770）年の築堤によるもので「溜井」と称し農業史・水利に係わる遺構である。



第5図 遺跡周辺旧地形図 (S=1/25,000)

第3章 発掘調査と整理の方法

第1節 発掘調査の方法（第6図）

発掘調査は、調査区全体に方眼をかけてグリッドにあわせた調査杭を設置し、グリッド単位の遺構プラン確認・調査を進めた。以下にその詳細を記す。

調査区の設定 本遺跡は街工道路建設工事範囲に設定されており、南東一北西方向に細長い。そこで、

その長軸方向に並行な直線を任意に設定し、それらを基準に一辺5m×5mの方眼（グリッド）に区画し、その四隅を基準として調査杭兼標高杭（ベンチマーク）を任意に設置した。調査区内北列を基準として南北方向はアルファベット、東西方向はアラビア数字を使用して両者を組み合せてグリッド名とした。現地にてはグリッド北西隅杭をグリッド名により呼称する方法をとった。調査区の南北軸は、真北に対してN-58°-Wである。

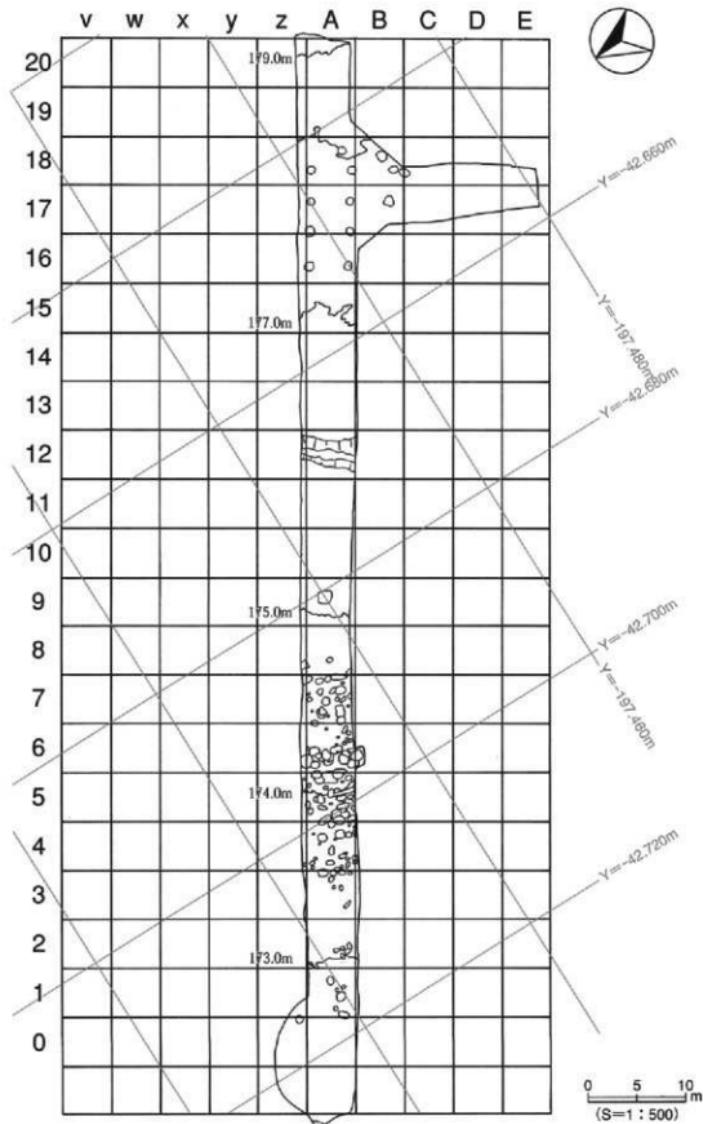
表土層・包含層の調査 現地調査にあたり、事前に調査範囲を踏査し、表面採集可能な遺物は採取した。また、試掘調査の結果、包含層の形成・残存土層は比較的薄く、かつ疊を多量に含む状況であった。

そのうえ、遺物が包含層中より出土する割合が比較的低く、かつ遺跡の時代背景を考慮の上、基本的に重機を使用して表土層の掘削を行い、包含層以下は慎重に重機を使用し遺構確認面に達した段階で調査を終了した。一部、包含層面以下に人力にてトレンチを掘削し層序・遺構・遺物の確認をおこなったが、他時期の遺構は検出されなかった。

遺構確認調査 表土・包含層の掘り下げののち、人力にて面精査を行って遺構確認面を検出し、遺構（プラン）確認を行った。そのほとんどは地山と称する褐色砂質土層面において行い、遺構フク土中の黒色土層との差異をプランとして認識した。遺構は確認した順位にて台帳登録を行い、その順位により通し番号を付して管理した。基本的には現場段階で登録した遺構番号を本報告書にて踏襲したが、整理作業により若干の修正を加えている。

調査区全体の調査 調査区全体に対しては、主に堆積土層の状況を確認する断面観察を行った。調査区北側の土層断面図を作成した。遺跡の南北方向については東西方向と異なり土層のグライ化が進んでおり、旧地形の影響か土質・土層供に変化している様子が窺えたため、調査区東側（C・D-18グリッド）の土層断面図を作成した。

遺構の調査 遺構は台帳登録後確認状況の写真撮影を行い、土層断面観察を行うための壁を残した状態で掘り込み、遺物の取り上げ・断面写真撮影・断面図作成等の調査を行った。遺構の断面図は基本的に縮尺S=1/10で作成したが、横断図（エレベーション）・溝跡断面図などの規模の大きなものは縮尺S=1/20で作成している。その後、残部を完掘し、完掘写真を撮って個別の遺構調査は終了した。平面図については、必要な箇所に対して縮尺S=1/20で作成したが、効率化を図るために航空写真測量を委託し作図用の写真撮影を行うほか、遺跡調査状況の空中俯瞰写真撮影も行った。この空撮図は縮尺S=1/40・1/100で作成した。また、写真撮影に間にし、断面状況は光線の都合で遺構の南面を掘削し断面を記録するよう努めたが、重複関係等の都合によってやむなく良好な写真記録が撮れなかったものがある。その他、遺構などで調査範囲を超えて広がるものもあり、可能な限り範囲拡張して記録化に努めたが、民地境界等によって十分確認することが出来なかつたものもある。なお、調査の進展により遺構登録名等を変更した場合があり、記録写真的表記と異同が生ずる結果となった。例言のとおり、本文を優先する。



第6図 グリッド配置図

第2節 整理の方法

1 整理作業の方法

ここでは、出土遺物及び記録類の資料化、並びに発掘調査報告書作成に係わる作業を一括して整理作業と呼ぶ。以下にその方法等を記す。

遺物 出土した遺物は、陶器・磁器・土器・石製品・金属製品・古銭・その他の種別に分類し、各々 遺構内のものは遺構別に、遺構外のものはグリッドに可能な限り分別し、それ以外のものは表面採集（表探）として出土地点・層位の属性を省略した。遺物は水洗の後、分類・接合作業を通して遺物台帳に登録した。登録件数は208点である。その後、注記・計測量等の作業を行った。注記内容は、観音堂遺跡の略称「KND」を冠し、遺物登録番号・遺構名・層位・取上日付の順に記入した。

整理作業の過程において出土遺物の大半を占める陶磁器については次のように取り扱うこととした。当初中世に主体をおく遺跡として調査に臨んだが、大半が近世後半～近代（19C～）に生産された陶磁器の破片の可能性が高いことが明らかとなつた。近世・近代を明確に区分するには困難であるため、遺構内・遺構外といった区分により優先性を決めた上で、詳細を検討することとした結果、近代以降が確実な資料は基本的に報告書掲載の対象外とし、本報告書には一部のみ掲載することとした。

図面 現地調査における図面類は平面図、断面図・横断図に分け、通し番号を付して整理した。基本的には各々縮尺1/40・1/80にてトレースし報告書に掲載した。近代遺構は掲載対象から除外した。

出土遺物は報告書掲載分を選別したのち、実測図を作成した。報告書には縮尺1/2で掲載している。

写真 リバーサル写真は個別に通し番号を付し台帳に登録した。出土遺物はリバーサル及びモノクロ・

ネガフィルムで撮影し、整理した。報告書には主な遺構及び遺物写真を掲載した。

2 遺構・遺物の分類

遺構・遺物は以下の通り分類した。

遺構 挖立柱建物跡・溝跡・柱穴・土坑・小穴に分類した。土坑と小穴とは規模による分類であり、概ね長軸径約50cmを境界としてそれ以上を土坑、それ以下を小穴とした。柱穴とは断面観察により柱痕があるものもしくは小穴の規模でもフク土が単層であるものを認定した。ただし、調査区の範囲内では小穴のみによる規則配列は認識できなかったため、建物跡とするには至らなかった。柱穴は建物跡を構成すると考えられるが、調査区の範囲内では規則配列を認識するには至らなかったものである。柱穴の中に礎石に相当する礎が混在したが、本報告においては礎盤礎と称する。

遺物 遺物はすべて人工遺物である。陶器・磁器・土器・土製品・石製品・金属製品・ガラス製品に分類した。この中でガラス製品を除く6項目に整理したが、細分は以下の通りである。

陶 器 濑戸美濃・唐津産と推定するものが出土。その他在地産と推定するものが出土。

磁 器 肥前系磁器が出土。19C代と推定する在地産磁器が出土。

土 器 繩文土器破片が出土。

土 製 品 近世後半から近代の時期に推定される窯道具が出土（桔梗台）。

石 製 品 碗形状の石鉢が出土。

金属製品 古銭が出土。また、銅を主成分とする金属製品（素材？）出土。

第3節 遺跡周辺の地形と層序（第3・7図）

遺跡周辺の現況は宅地・果樹園・畑地・水田等に利用されてきた。また、遺跡北約50mのところに市道上桜田線がはしり青田集落と上桜田集落を結んでいる。この集落間をぬう形で灌漑用の堰があり、遺跡周辺では青田沼より取水した堰が豊富な水量で流れている。発掘調査によって調査区南側の水田棚田地下は粘性の強い砂質土が厚く堆積し、水の流路であった可能性が高いと考えられる。また、遺跡北側は集落を過ぎると同じく棚田が広がり、踏査の結果南側同様に地形的に低くなっていた。遺跡は主に畑地に立地するが、現千手観音堂宇や集落及び畑地を含めてその周囲の水田地帯よりも微高地に存在したものと考えられる。調査区内の土質を概観すると、基本的に畑地に立地するため砂を多量に含む砂質土が基本となる。また、脆い凝灰岩質の礫が多様な粒径にて極めて多量に混入する。そのほか、表土直下の比較的浅い地層より、安山岩質の礫が比較的多量に出土した。そのほとんどが円礫で河川流域の転石を予測させるものであった。その一部は耕作により包含層中に混在し、また地山の砂質土層が覆っているものもあった。遺構と認識して調査した結果、こうした礫の抜け痕であった事例も多數ある。このことから、礫を多く含む本遺跡周辺の土壤は、龍山川の氾濫原が2次的に流出し再堆積したものとの可能性も考えられる。⁽¹⁾

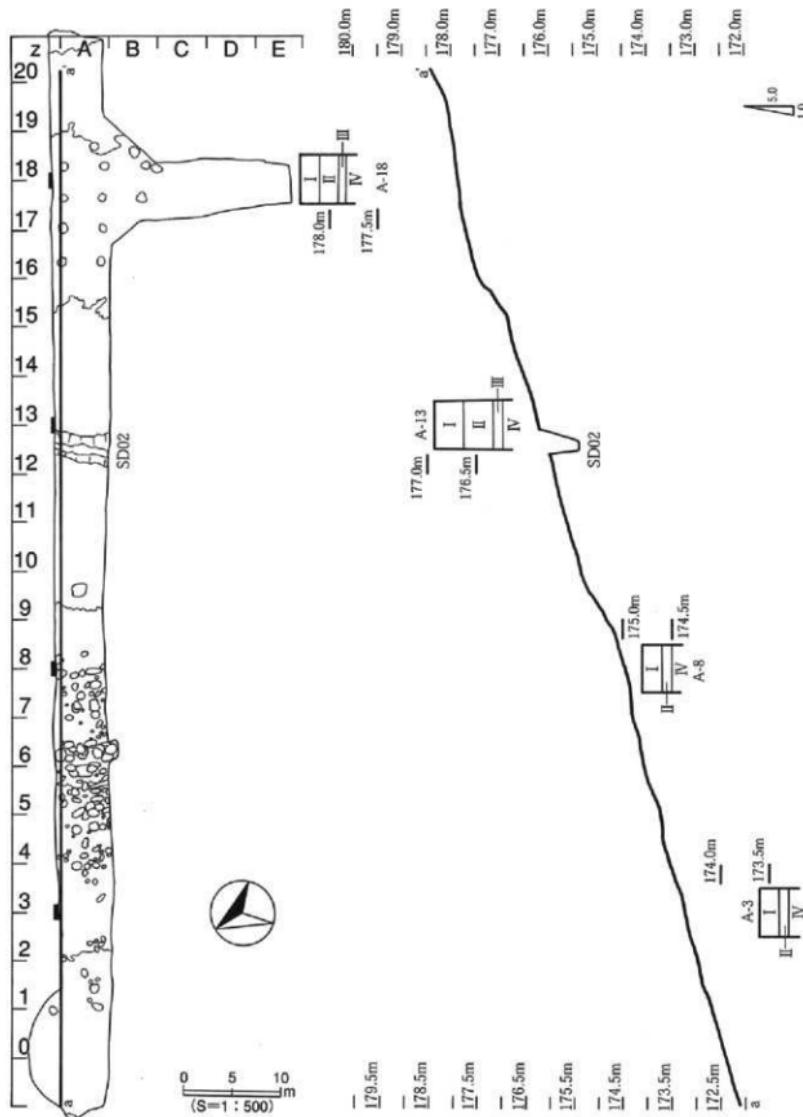
遺跡の標高は、調査杭東端A-21で178.3m、西端A-0で172.3mを測り高低差約6mである。傾斜は概ね均等に傾斜しているが、A-15・16付近でやや急傾斜となり円礫が多量に分布する。その東側は傾斜が緩やかな地点が広がり、後述する掘立柱建物跡SB01が出土した。A-21より東側では再び急傾斜となり調査区外の旧棚田へとつながる。遺跡の基本層序は田・畑といった環境による影響を認識した上で地層を10層に分類した。しかしすべてが整層堆積する訳ではないため、遺跡の形成過程を概観するためそれらを4項目にまとめた。

ローマ数字は基本層序の概観をあらわし、I層は表土・耕作土、II層は遺構構築層及び遺物包含層、III層は漸移層、IV層は地山である。ただし、II C層は水田下で認められ、ややグラ化による色調の変化が認められた層序でII B層と同質であるが、IV A'層に繋がる層準のため地山の可能性が高い。

また、IV層は4種だが、これもすべての地点で整層堆積を確認したものではない。基本的にIV層中には凝灰岩質小礫を含むが、IV A'層とはIV層とIV B層との境界で多量に礫が集積している部分を指す。

以下に、基本層序を記す。

I A層	黒褐色砂質土層	10YR3/2	粘性ややあり	縮まりあり	耕作土（畑地）
I B層	黒褐色粘土質土層	10YR2/2	粘性あり（強い）	縮まりあり	耕作土（水田）
II A層	黒色砂質土層	10YR2/1	粘性ややあり	縮まりあり	遺物包含層
II B層	黒色砂質土層	10YR2/1	粘性あり（強い）	縮まりあり	遺物包含層
II C層	灰黄褐色砂質土層	10YR4/2	粘性あり（強い）	縮まりあり	地山
III 層	にぶい黄褐色砂質土層	10YR4/3	粘性ややあり	縮まりあり	漸移層
IV A層	褐色微砂質土層	10YR4/6	粘性ややあり	縮まりあり	地山
IV A'層	褐色微砂質土層	10YR4/6	粘性ややあり	縮まりあり	地山
IV B層	にぶい黄褐色細砂質土層	10YR4/3	粘性ややあり	縮まりあり	地山
IV C層	暗褐色砂質土層	10YR3/3	粘性ややあり	縮まりあり	地山



第7図 遺跡層序柱状図・IV層エレベーション図

第4章 検出遺構・遺物

第1節 検出された遺構（第8～19図）

1 概 要

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条、柱穴26基、土坑63基、小穴29基で登録遺構件数は123件である。調査区全長105mのうち、遺構の確認域はおよそ90mの範囲である。分布範囲を詳細にみると、A-1から8グリッドの掘立柱建物跡(SB148・155)・溝跡(SD105)・柱穴・土坑・小穴の集中域と、やや離れてA-12グリッドの溝跡(SD02)1基、さらに離れてA-16から18グリッドの掘立柱建物跡(SB01)・土坑群のまとまりに分けられる。掘立柱建物跡は近世に所属する可能性が高い2棟と、近世から近代にかけての時期に所属する可能性の高い1棟とが検出され、前者は重複し新旧関係が窺える。柱穴は形状や・状態により柱痕が残る柱穴・礎盤礎を伴う柱穴等に細分したが、建物跡等を推定するには至っていない。土坑・小穴とも出土遺物を伴わない例が多く、所属時期や性格を明らかにし得なかった。遺物は整理箱で1箱分出土した。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡として確認したものは3棟である。この他にも多数の柱穴・小穴を検出したが、積極的に建物跡とするには至らなかった。以下に各建物跡について概述する。

SB01（第9・11・20図）

（位 置） A-16からA-18グリッドに位置する。

（重複関係） 他の遺構との重複関係はない。ただし土坑SK07と柱穴EP6との間隔は、EP2とEP6との梁行間隔4.0mとほぼ同等であり、関連性を窺わせるものかもしれない。

（規 模） 梁行3間、梁行1間の規模である。坑央における間隔で桁行10m（5間3尺）・梁行4.1m（2間1尺5寸）を測る。桁行柱間は3.1～3.5m（1間4尺～5尺）である。

（柱 穴） 確認面における平面形状は円形及び隅丸方形を呈する。長軸径約88～68cm、深さ45～20cmを測る。規則的な配列を示す柱穴だが、柱痕跡はない。礎盤礎は存在しない。

（出土遺物） 柱穴EP2フク土より肥前系磁器、EP4より唐津産（？）陶器皿が出土した。

この建物跡は、調査区東側においてほぼ単体で確認された遺構で、主軸を南東～北西方向にもつ。遺構の立地地点は、扇状地傾斜面がややゆるむ緩斜面にあたり、西隣するA-15グリッド以西は傾斜度を増し、かつ地山礎層が露出する状況であった。同様に東側A-19グリッド、南側C-17グリッドの外周はいずれも急傾斜地でありかつ礎層であった。柱穴フク土は黒褐色を呈し、地山ブロック等をあまり含まない。色調からは、基本層序のI層（表土層）に類似性が高いと認識した。出土遺物からは遺構の所属時期は17世紀代に遡る可能性も窺われるが、規模が大きい点・柱穴の形成状態・フク土の層序より江戸時代後半から明治時代に遡る可能性が高いと推測している。

SB148（第10・11・15図）

（位 置） A-6からA-7グリッドに位置する。

（重複関係） SB155との直接的な重複はない。ただし、各柱穴の重複関係をみると、EP1・EP4で各々SK11・37・66より新しい。また、EP5はSK23より古い。

- (規 模) 枠行3間以上、梁行1間の規模である。調査区外に拡張するため確認可能範囲で枠行(EP3～5間)3.7m・梁行4.4m(2間2尺5寸)を測る。枠行柱間は確認できた範囲で1.8～1.9m(1間から1間2寸)である。
- (柱 六) 確認面における平面形状は円形及び隅丸方形を呈する。長軸径約110～80cm、深さ60～47cmを測る。断面観察よりEP2では柱痕が確認された。また、EP4においては柱の抜き取り痕跡が確認されている。検出した5基すべての柱穴に礎盤と考えられる平らな礎が敷かれている。

(出土遺物) なし。

この建物跡は、調査区西側において確認された造構で、主軸を北東～南西方向にもつ。造構の立地地点は、扇状地傾斜面がややゆるむ緩斜面にあたり、A-4からA-7グリッドまでの柱穴集中域にある。

柱穴フク土は黒色から黒褐色を呈し、地山細砂のブロックを多量に含む。造構確認面からの深さも概ね50cm以上あり、旧地表面からの掘削深を推定するとかなり堅固な構造といえる。SK11・37・66よりも新しいことがわかったが、それらは供伴する遺物が無く所属時期の上限は推定が困難である。しかし、SK23は近代磁器片をともなうため、本建物跡は下限を近代以前と捉えられる。

SB155(第10・12・15・17・20図)

(位 置) A-5からA-6グリッドに位置する。

(重複関係) SB148との直接的な重複はない。各柱穴の重複関係は次の通りである。EP3・EP8で各々SK25・55より新しい。また、EP1はSK63、EP2はSP32、EP4はSK27、EP5はSK121、EP6はSP42、EP8はSK54より各々古い。EP3はより新しい造構に壊されることなく、EP7は重複関係がない。EP8は重複関係が多彩な地点で、最も新しい順位となるSK54には礎盤礎の可能性が高い礎が混入する。EP8はSK54より古いことが明らかである。

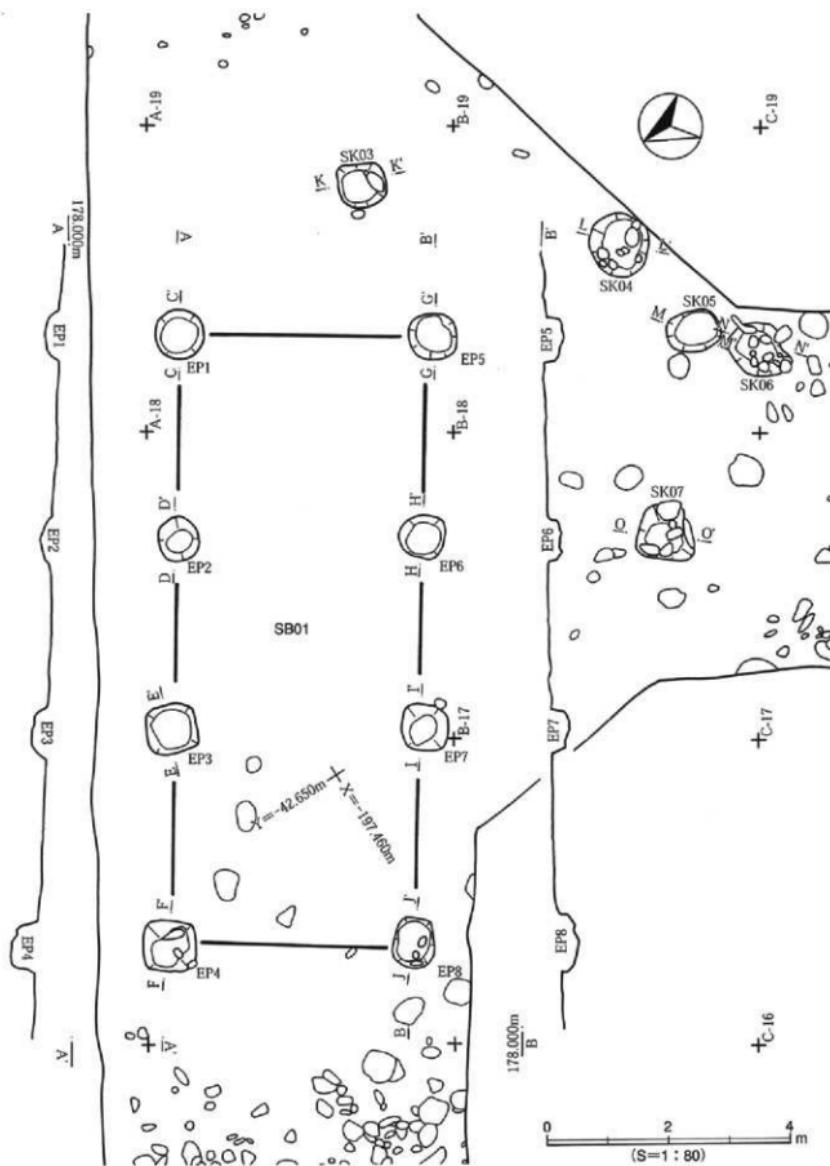
(規 模) 枠行3間、梁行1間以上の規模である。坑央における間隔で枠行6.7m(3間4尺1寸)・梁行2m(1間6寸)を測る。枠行柱間は2.2から2.5m(1間1尺～2尺)である。

(柱 六) 確認面における平面形状は円形及び梢円形を呈する。長軸径約144～82cm、深さ69～32cmを測る。断面観察よりEP1・2・3・7では柱痕が確認された。礎盤礎はない。

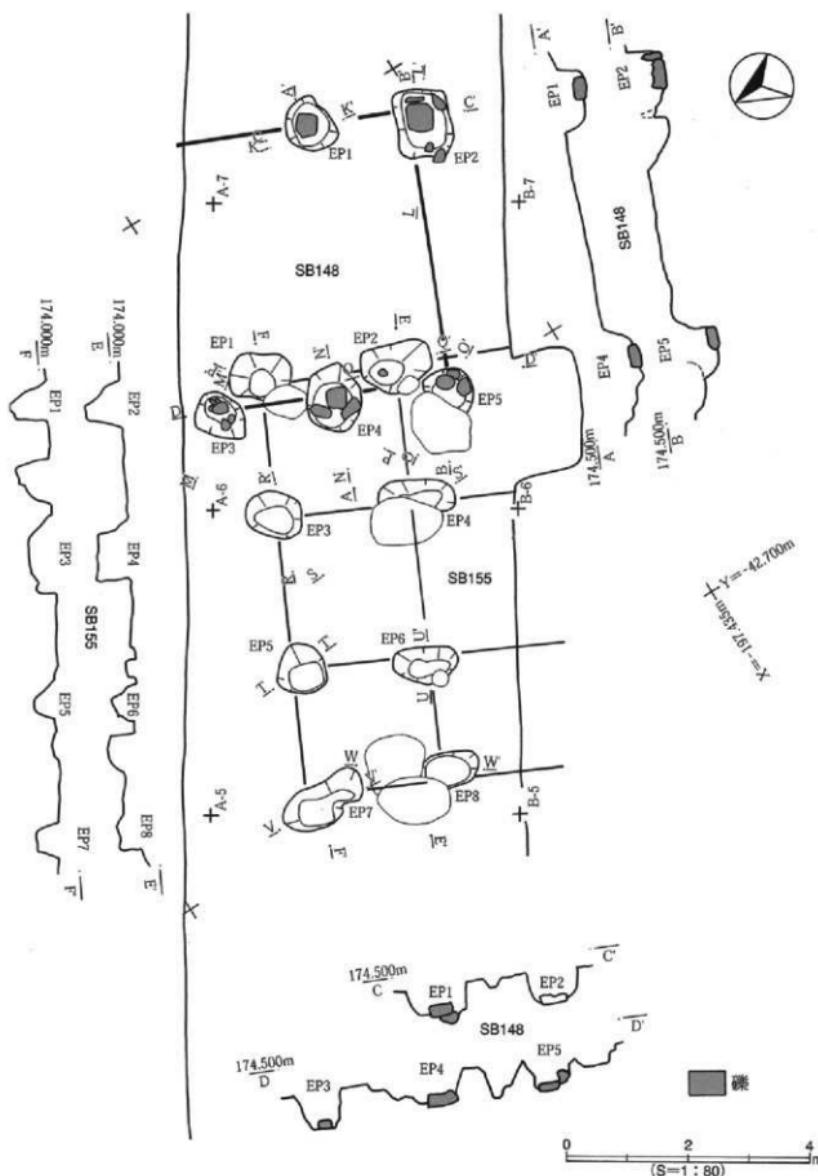
(出土遺物) 柱穴EP3フク土より瀬戸美濃産陶器碗破片が出土した。

この建物跡は、調査区西側において確認された造構で、主軸を北西～南東方向にもつ。造構の立地地点は、扇状地傾斜面がややゆるむ緩斜面にあたり、A-4からA-7グリッドまでの柱穴集中域にある。

柱穴フク土は黒色から黒褐色を呈し、地山細砂のブロックを多量に含む。造構確認面からの深さも概ね50cm以上あり、旧地表面からの掘削深を推定するとかなり堅固な構造といえる。EP1から7にかけての東西列と、EP2から8にかけての東西列とでは梁行間隔が約2mで狭く、軒廊の可能性が高いと考えられる。出土遺物の年代観では、16世紀代が所属時期の上限であると推測される。また、重複関係から捉えられる年代観については、良好な供伴遺物に乏しく下限を推定するには至らない。ただし、礎盤礎が設置される柱穴よりも古い時期に所属する可能性がEP8とSK54、EP1とSK63の重複関係から窺うことができる。よって本建物跡の所属時期は、下限がSB148以前の時期となる可能性が高い。

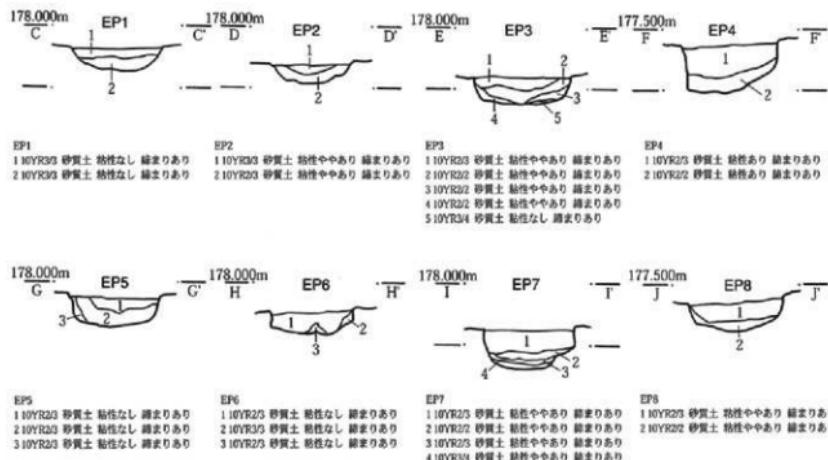


第9図 遺構平面図・横断図（1）

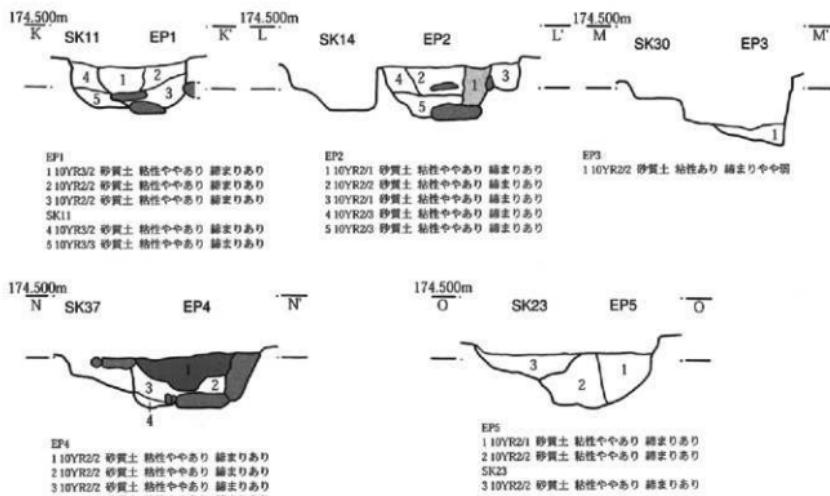


第10図 遺構平面図・横断図（2）

SB01



SB148



柱底 柱 穴 柱の抜取痕

0 1 2
(S=1:40) m

第11図 掘立柱建物跡・柱穴断面図（1）

SB155

174.500m

P

SK37

SB148EP4

SK63

EP1

P'

174.500m

R

SK25

EP3

R'



EP1

- 1 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
2 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
3 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
4 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
5 10YR3/4 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
SK63
6 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり



EP3

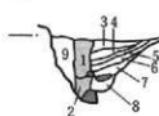
- 1 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
2 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
3 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり

174.500m

Q

EP2

Q'



EP2

- 1 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
2 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
3 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
4 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
5 10YR3/3 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
6 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
7 10YR3/3 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
8 10YR3/3 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
9 10YR4/4 砂質土 粘性ややあり 線まりあり

174.000m

V

EP7

V'



EP7

- 1 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
2 10YR3/3 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
3 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり

174.500m

S

SK33

SK27

EP4

174.000m

T

EP5

T'

174.000m

U

EP6

U'



EP4

- 1 10YR3/4 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
2 10YR3/1 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
3 10YR3/1 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
4 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
5 10YR3/4 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
6 10YR3/4 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
7 10YR2/3 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
8 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
9 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり

SK27

- 7 10YR2/3 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
8 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
9 10YR2/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり

SK33

- 4 10YR2/1 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
5 10YR2/1 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
6 10YR2/1 砂質土 粘性ややあり 線まりあり
7 10YR3/2 砂質土 粘性ややあり 線まりあり

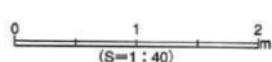
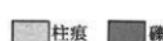
174.000m

W

SK55

EP8

W'



第12図 挖立柱建物跡・柱穴断面図（2）

3 溝 跡（第13図）

溝跡としたものは2条ある。以下に各溝跡について概述する。

SD02

(位 置) A-12グリッドに位置する。

(重複関係) 他の遺構との重複関係はない。

(規 模) 調査区を横断する形で延伸しており、全長は不明。方位としては北東から南西方向に向く。確認面における溝の確認長は約5m、最大幅は約3.5mで、最深部で確認面より80cmを測る。概ね北側より南側に向けて傾斜がつき、断面形状はV字状を呈する。

(出土遺物) 人工遺物はなし。礫が溝内北側に集中して出土した。なかには焼成痕がある礫も含まれたが、いずれも自然礫であった。

この溝跡は、調査区東側において確認された遺構で、東西10m以上にわたり他の遺構が存在しない地点である。遺構の立地点はやや緩斜面に位置するが、他の建物跡等が位置する面よりも傾斜は急である。溝跡内のフク土の状態は、自然堆積層を示し、人為的な埋め戻しその他の状況を窺うことはできなかった。溝内は地山である溝壁部分が崩落堆積した土層を含み、溝の形成後の自然時間経過状態を示すものと考えられる。また、通常水性堆積層と認識される薄い砂の互層状堆積層は確認されず、水流が常にあったとは認識できなかった。溝内より出土した礫は溝底面よりやや浮いた状態で確認された。このことから、礫については溝の形成後、ある程度の時間経過後に混入したもののか可能性が高いと推測される。この溝跡については人為的に掘削された可能性が高いと推測するが、その性格についてはなお不明な点が多い。調査区北壁部において観察した限りにおいては、溝跡排土を盛土した形跡はなく堀・土塁といった遺構との認識を持つには至らなかった。また、出土遺物及び遺構の重複等が認められないため、所属時期は不明である。ただし、本遺跡内における位置については溝跡の東西に配置された建物跡群が広がる空間を分離する役割を担っていた可能性が窺える。

SD105

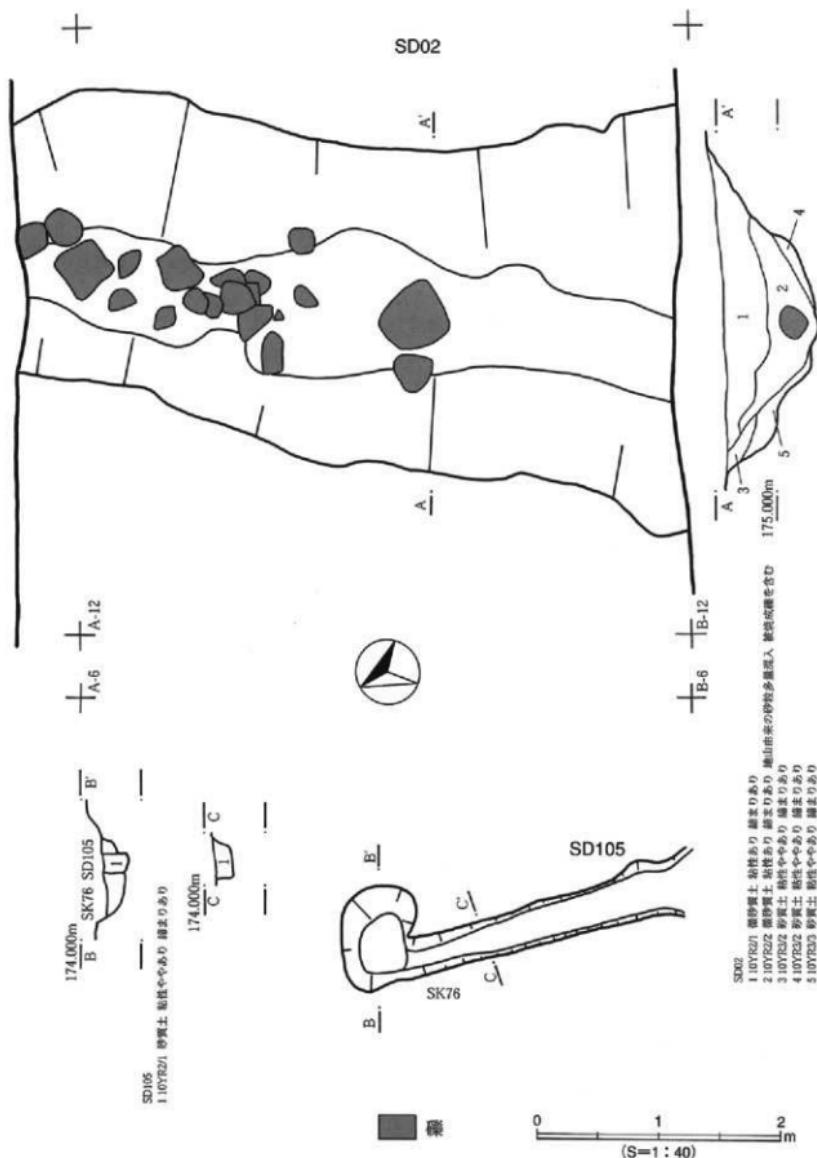
(位 置) A-5グリッドに位置する。

(重複関係) SK76より新しい。

(規 模) 調査区の南側に延伸しており、全長は不明。方位としては北から南方向に向く。確認面における溝の確認長は約2.5m、最大幅は約50cmで、最深部で確認面より20cmを測る。断面形状はU字状を呈する。

(出土遺物) なし。

この溝跡は、調査区西側において確認された遺構で、建物跡・柱穴・土坑の集中域にあり、比較的緩斜面上に立地する。溝跡内のフク土は自然堆積層を示し、また水性堆積層と認識する薄砂互層状堆積層は認められなかった。SK76と重複し、断面観察より新しい時期に属すると考えられるが、SK76の地点で溝跡が端部となっていることから関連性が窺えるものかもしれない。SK76は土坑であることが確認されたが、出土遺物がないため所属時期は不明。同様にSD105も出土遺物が無いため所属時期は不明である。



第13図 遺構平面図・断面図（3）

4 柱穴・土坑・小穴（第14～20図）

柱穴は26基、土坑は63基、小穴は29基確認した。以下に各遺構別に概述する。

柱穴

柱穴は、柱痕が残る土坑もしくは小穴、あるいは礎盤礫と考えられる礫が付属する土坑を主に分類した。

柱痕がある柱穴（SK09・14・16・43・53・54・61・72・73・SP32・34・35・40・41・42・46・68・71）

18基確認した。そのうち礎盤礫が付属する柱穴はSK54の1基のみである。礫は直径35cmほどの安山岩の扁平な自然礫をもちいていた。柱穴の規模はSB148・155と同じであるため、この柱穴は建物跡を構成した一部と考えられる。礎盤礫ではないが根堅め石と考えられる礫が混在する柱穴はSK09・16・72・SP32・68の5基である。礫は直径10～15cm程度の自然礫であり、坑底部およびその側面にあった。それ以外の12基は柱痕のみ確認された柱穴である。柱痕と認識した土層はおよそ10～20cmの幅をもち、各々が柱の径に値すると考えられる。出土物はないため所属時期は不明であるが、掘立柱建物跡を構成する柱穴群と考えられるため、近世に所属する可能性が高いと推測する。

礎盤礫があり柱痕がない柱穴（SK64）

断面確認では柱痕が認められなかったが、坑底部に自然礫が設置されたもので柱穴に分類した。礫は、長軸径約35cmのやや楕円形を呈する扁平礫で、安山岩である。柱穴も長軸がやや細長い形状で坑の途中で段差が認められた。あるいは抜き取り痕跡の可能性もある。付近には前出のSK54が礎盤礫をもち互いの間隔は約1.7mである。しかし、坑の方向や建物跡を構成するに足る柱穴が他に確認できなかったことから同一の建物跡を構成する可能性は低いと考えられる。出土遺物はなく所属時期は不明で、形状から近世に所属する可能性が高いと推測する。

規模・形状から推定した柱穴（SK56・74・77・SP15・18・58・59）

7基確認した。各々柱穴とするにはやや曖昧さが残るが、推定根拠も含め次のとおり細分した。SK56・74・77は長軸径が80cm以上の細長い造構で断面観察では柱痕が認められなかった。しかし、各々が柱穴の重複した箇所、あるいはその付近に位置するため規模により柱穴とした。SK74からは用途不明の金属製品（第20図11）が出土したが所属時期は不明で、形状から近世に所属する可能性が高いと推測する。SP15・18・58は坑径が45cm以上と広めで、確認面からの深さが浅めの小穴である。形状が隅丸方形に近い特徴やフク土状態が単層を呈することから柱穴と認定した。出土遺物はなく所属時期不明である。SP59はやや大きめの自然礫が縦位置で混在した状態で確認された。柱痕はないが、おそらく根堅め石と解釈して柱穴とした。

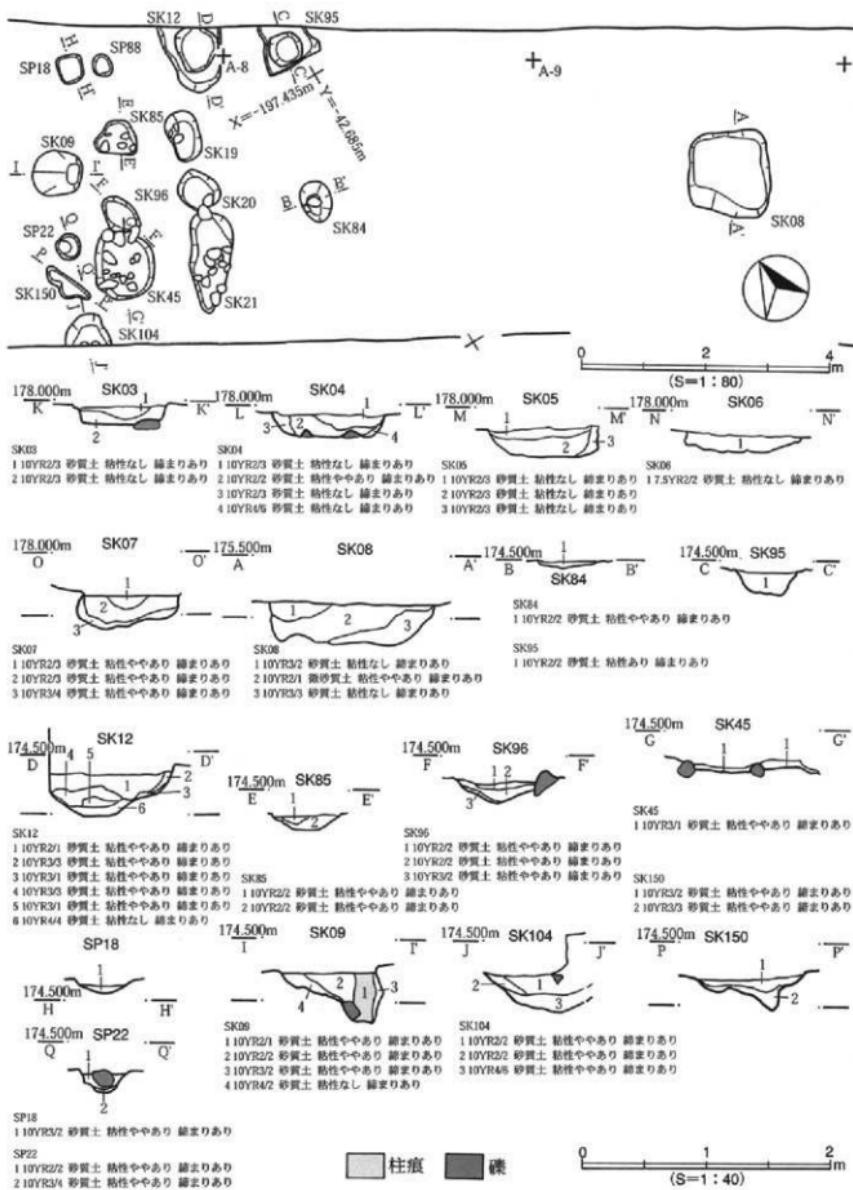
土坑（SK03・04・05・06・07・08・11・12・19・20・21・23・25・27・29・30・31・33・37・45・47・51・55・60・63・66・67・75・76・81・84・85・95・96・104・110・111・112・113・114・116・119・120・121・131・135・136・137・138・139・140・141・142・143・144・145・146・147・149・150・153・154・156）

土坑は概ね長軸径約50cm以上の遺構を分類した。形状等は各種存在し、かつ遺構の重複等により全体が不明なものも含んでいる。また、柱痕等が認識できないものや積極的に柱穴に認定できなかったものを含む。以下に個別的に概述する。SK03～07まではA-18・B-17～18グリッドに所在する。SB01の周辺に位置し、SK07はSB01に付属する可能性も示している。SK04からは永楽通宝が2枚重なって出土した（第20図4・5）。所属時期は16～17世紀代と推測される。SK07からは地蔵尊を意

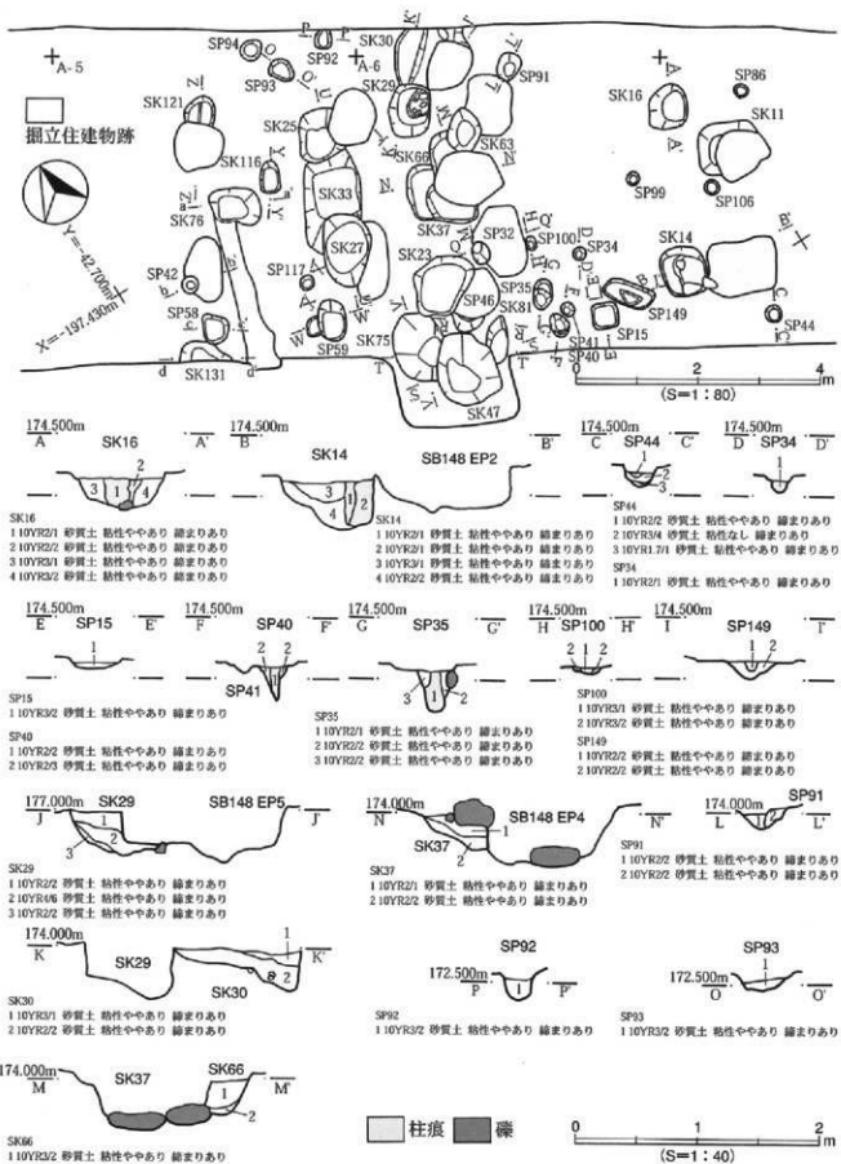
匠としたと考えられる瀬戸産磁器瓶?が出土した(第20図3)。所属時期は江戸時代後半の19世紀と推定される。SK08はA-9グリッドに所在し、隅丸方形を呈する規模の大きな土坑である。出土遺物はなく時期不明。SK11はSB148EP 1と重複する古い遺構。近世に所属する。SK23はA-6グリッドに所在し、SB148EP 5と重複する。近代陶磁器が出土。SK25はSB155EP 3と重複する古い遺構。近世に所属する。SK27もSB155EP 4と重複する新しい遺構。出土遺物はなく時期不明。SK29はSK30と重複する新しい遺構。フク土より在地産と考えられる陶器鉢破片が出土(第20図8)。両土坑とも近世に所属する。SK31は比較的規模の大きな土坑で重複はない。出土遺物もなく時期不明。SK33はA-5グリッドに所在し、SB155・SK25・27と重複する。新旧関係においてはいずれの遺構よりも古い。17世紀代までさかのぼる可能性があるが、出土遺物はなく時期不明。SK37はA-6グリッドに所在し、SB148・SK66と直接重複関係にある。新旧関係においてはいずれの遺構よりも古い。SB148EP 4と重複するため遺構の形状・性格について明言できないが、柱穴の可能性もある。出土遺物はなく時期不明ながら、近世に所属する可能性が高くSK66も同様である。SK47はA-6グリッドに所在し、調査区南面に拡張した範囲より検出した。SK75・81と重複する。新旧関係においてはいずれの遺構よりも新しい。規模は比較的大きいが性格は不明。フク土より肥前系磁器碗破片が出土。SK75・81とともに近世に所属する。SK51はA-4グリッドに所在する。重複はなし。フク土より石鉢破片が出土。近世に所属する。SK55はA-5グリッドに所在する。SB155EP 8・SK54・60と重複する。新旧関係においてはSK54より古く、SK60より新しい。周囲には柱穴が集中するため本土坑も柱穴の可能性もある。出土遺物はなく時期不明ながら、近世に所属する可能性が高い。SK60も同様であり、フク土より繩文土器片出土(第20図9)。SK63はSB148・155と重複する。SB148EP 4より古く、SB155EP 1より新しい。両柱穴が深さ40~60cmを測るのに比べ約20cmと浅く、柱穴ではないと解釈した。出土遺物はなく時期不明ながら、掘立柱建物跡との重複関係より近世に所属すると考えられる。SK76はSD105と重複する。新旧関係は断面観察によりSD105が新しい。ただし、SD105は本土坑で端部となることから、関連性がある可能性がある。出土遺物はなく時期不明。SK85はA-7グリッドに所在する。浅めの土坑で重複はない。フク土より肥前系磁器碗破片が出土。近世に所属する。SK121はSB155EP 7と重複する。新旧関係はSB155より新しい。フク土より瀬戸産磁器破片が出土。所属時期は近世後半より近代にかけてと推測する。SK146はA-1グリッドに所在する。SK141と重複する。新旧関係はSK146が新しい。周辺にはSK140・142~145・147が所在するが重複関係にいはない。同じくSK135~139も集中するが重複しない。いずれも出土遺物がなく時期不明。SK153・154はA-3から4グリッドに所在する。柱穴SK73・74と重複関係にある。新旧関係ではSK154よりSK73が新しい。いずれも出土遺物がなく時期不明ながら、SK74が近世に所属する可能性が高いことから、SK154の所属時期は近世と考える。

小穴 (SP22・44・78・79・80・86・88・91・92・93・94・99・100・101・102・106・107・108・109・117・122・123・124・125・126・127・128・129・130)

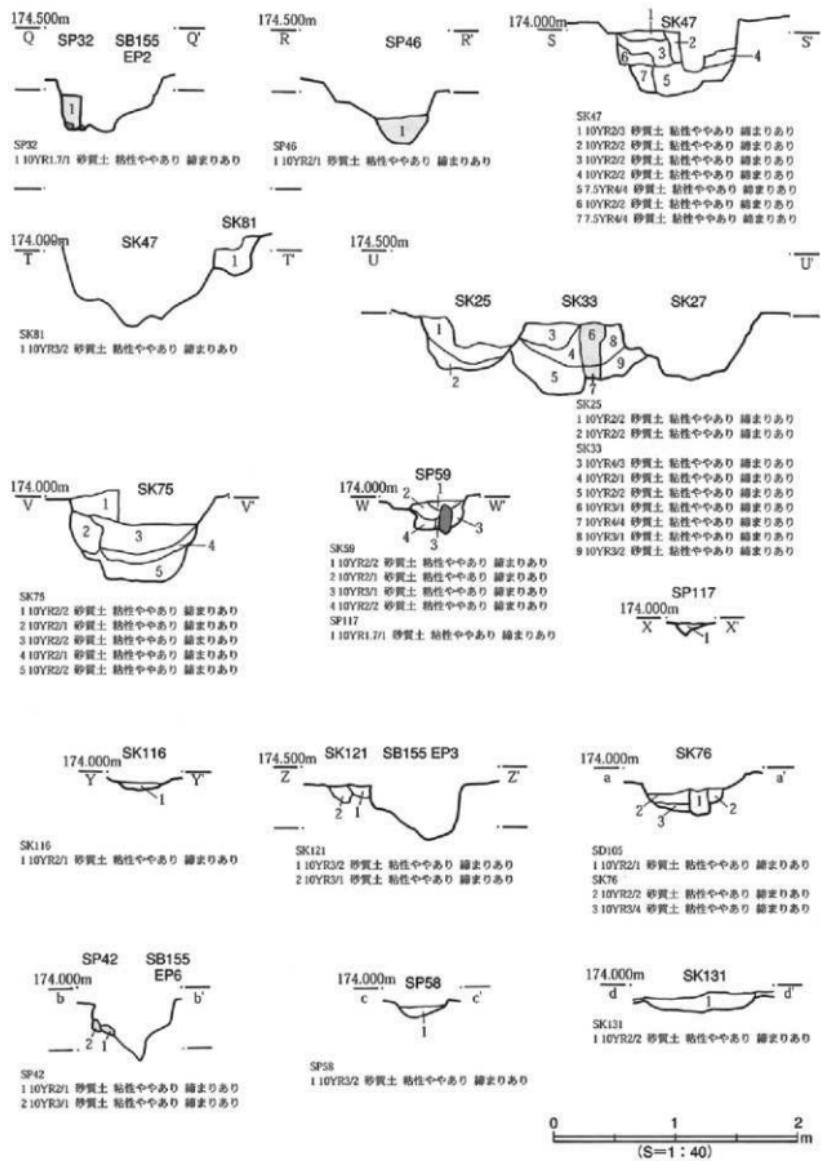
小穴は、長軸径が50cm以下の遺構を分類した。大部分が深さ20cm以下の浅い遺構である。SP22は直径42cmの円形小穴である。フク土より瀬戸美濃陶器碗破片が出土。所属時期は16~17世紀代と考えられる。その他小穴については配置関係等を明らかにするには至らなかった。よって、これら小穴は性格・所属時期が不明である。



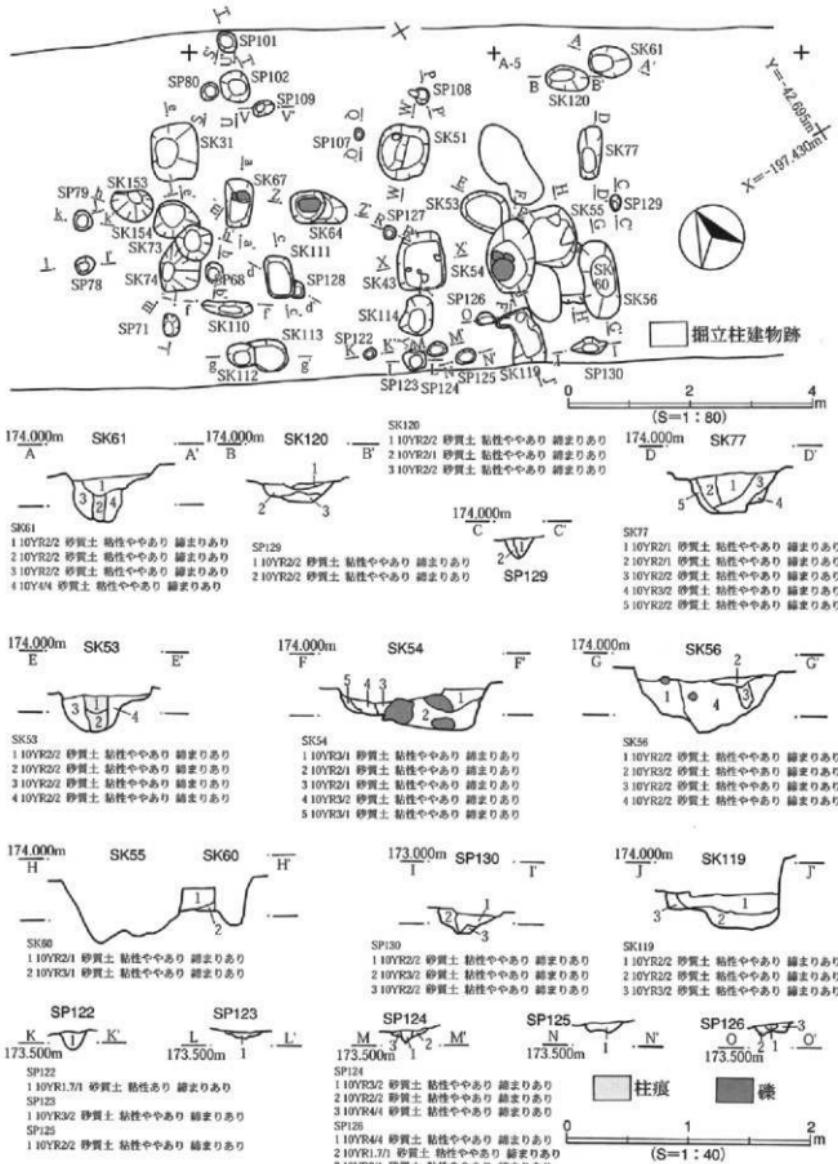
第14図 遺構平面図・断面図 (4)



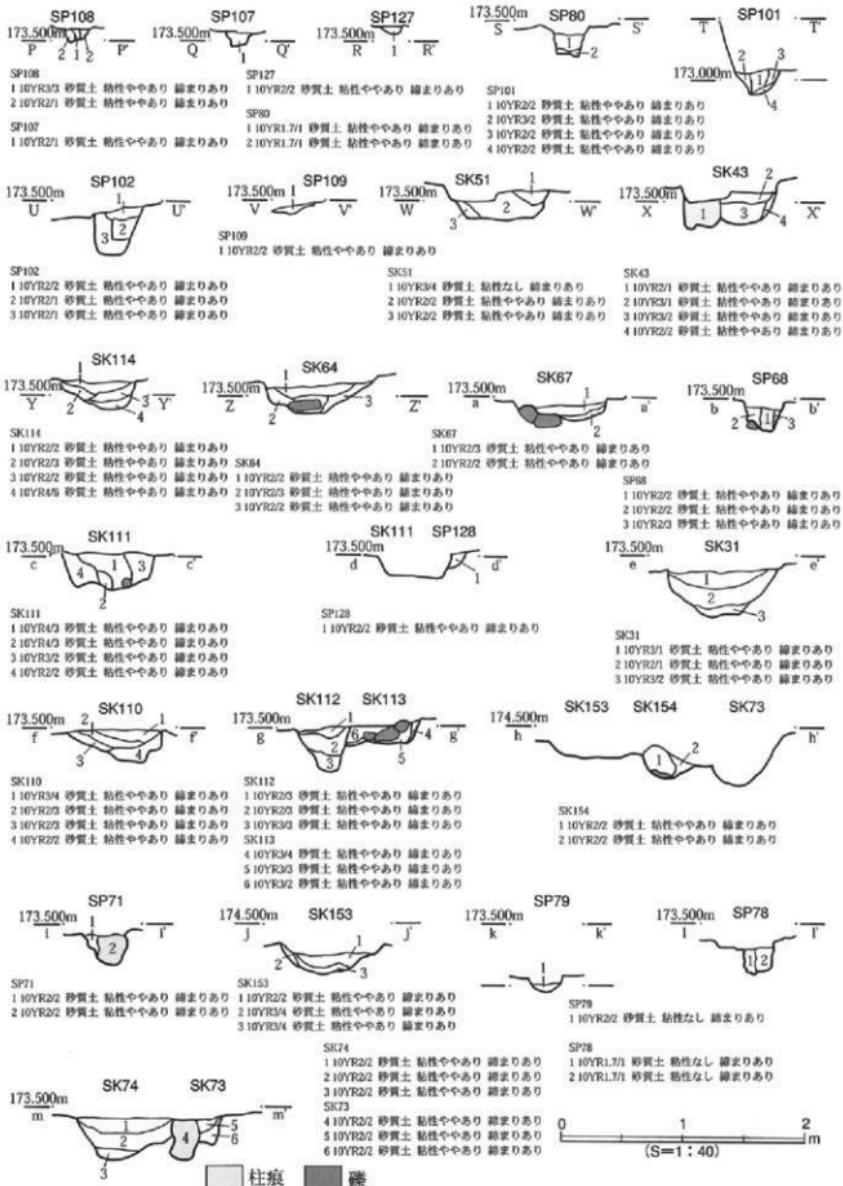
第15図 遺構平面図・断面図(5)



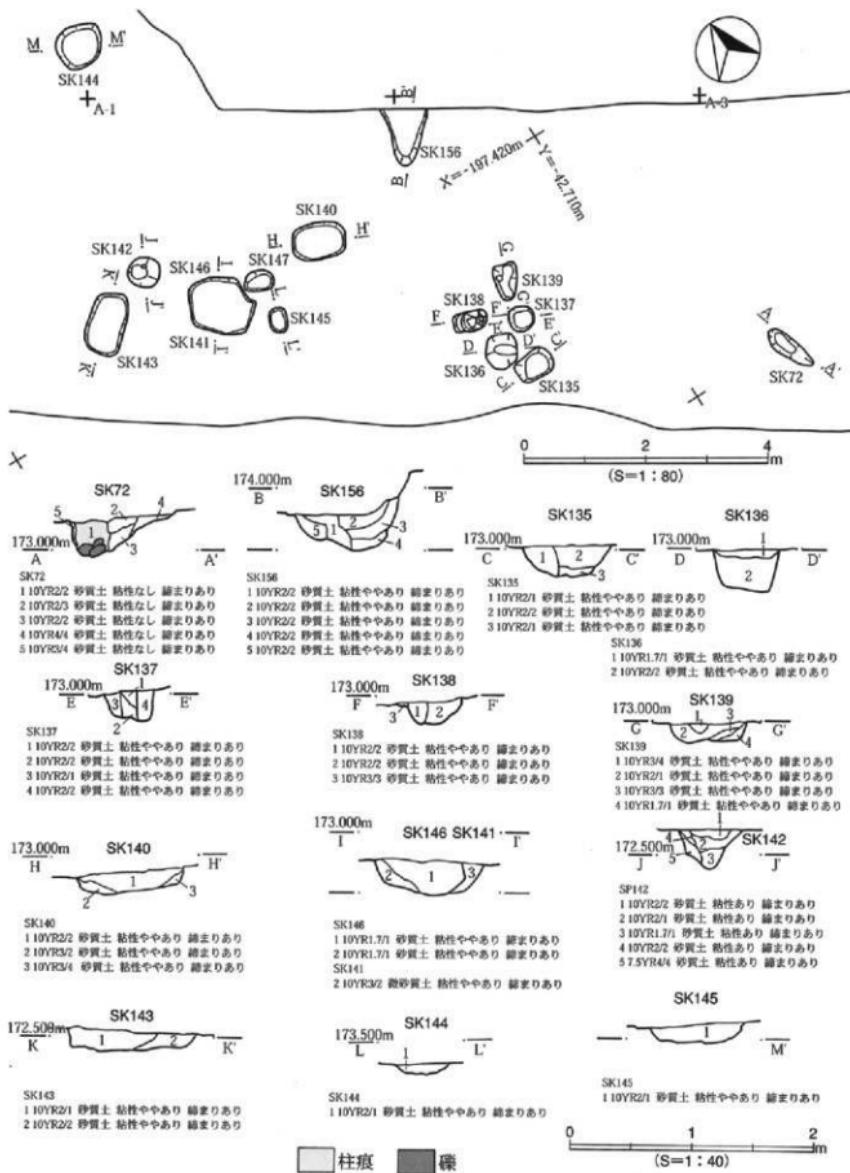
第16図 遺構平面図・断面図 (6)



第17図 遺構平面図・断面図 (7)



第18図 遺構平面図・断面図 (8)



第2節 出土遺物（第20～21図）

1 概 要

出土した遺物は整理箱にして1箱分である。基本的に現地では発掘調査に係わる表土掘削・カクラン土坑・調査区周辺の表面採集により発見した遺物についても採取した。しかしながら遺物の出土量は概して少ないと見えよう。そのなかで主たる遺物の種類は陶磁器が圧倒的に多く、かつ微細な破片資料が極めて多い。よって主たる時期は近世から近代にかけてと捉えているが、遺物の生産年代については不明なものが多い。したがって、遺物は遺構内出土の遺物を主たる対象として報告する。

2 遺構出土の遺物

1は染め付け碗？もしくは鉢の口縁部破片で肥前系磁器である。SB01EP2フク土より出土。2も同様にSB01EP4フク土出土の陶器皿で、底部周辺の破片である。内面施釉・外面露胎で削り出し高台を持つ。また、内面には胎土目痕がつき釉の変色から被熱した可能性がある。唐津産陶器で17世紀代に遡る可能性が高い。このようにSB01からは近世前半の遺物が出土する一方、図化省略したもののが瀬戸産磁器細片で19世紀以降に生産されたと考えられるものも混在する。3は磁器破片で、SK07フク土より出土した。外面は浮き彫り的な装飾性に富み、内面は無釉である。地蔵尊などを象った容器の装飾部分破片と推測している。瀬戸産で19世紀以降の可能性が高いと考えている。同遺構より細片ながら在地産陶器破片も出土している。4・5は銅錢の永楽通宝。SK04より出土した。2枚が表面同士接合した状態で出土し、文字面が鮮明に残っていた。地鎮の痕跡かもしれない。6は瀬戸美濃系陶器皿破片。SB155EP3フク土より出土。口縁はやや端反りぎみである。7も同産地と考えられ、SP22フク土出土である。8は在地産陶器鉢の口縁部破片。SK29フク土より出土した。口縁は外面に折り返しており丸みを帯びる。内外面共に透明釉がかかる。推定される口内径は約16cmである。生産年代は不明。9は繩文土器片。SK60フク土より出土。妻の胸部破片と考えられる。RL単節繩文が施文されているが時期不明である。SK60はA-5グリッドに所在し、SB155・SK54・55・56と重複しもとも古い時期に所属することが明らかである。ただし、遺構分布の状況から本遺構が繩文時代に遡る可能性は低いものと考えられ、本遺物は流れ込みによるものと推測している。10は石製品の石鉢破片である。SK51のフク土より出土した。安山岩製で内外面を粗く成形しており、内面には鉄製工具によるノミ加工痕と考えられる条痕が認められる。また口縁部は広く幅約2cmを有し、丁寧に磨りみがかれている。在地産のもので中世～近世にかけて周辺の遺跡からも出土しているが、本遺物に関しては形態や加工技術から近世に所属する可能性が高いと考えられる。11は用途不明の金属製品。SK74のフク土より出土した。全体が錆錫に覆われているので銅をふくむ金属の可能性が高い。残存する形状からは本品の機能を推定することは困難である。しかしながらその特徴は全体に円形を呈する個体の一部分の可能性が高く、外周部分の弧の形状はよく保たれている。表面的に意匠の様な凹凸は認められたが、詳細を確認することはできなかった。所属時期は不明だが、SK74は柱穴であり周辺の状況より近世に所属する可能性が高いと考えられる。12は染め付け碗破片で肥前系磁器である。SK85のフク土より出土した。外面に草木文が描かれている。13は桔梗台でSK98のフク土出土である。本品は近代に所属するため遺構は図化していない。これらは通常生産地において使用された窯道具の一種であるため、この出土は流通事情を反映しているのかもしれない。

3 遺構外出土遺物

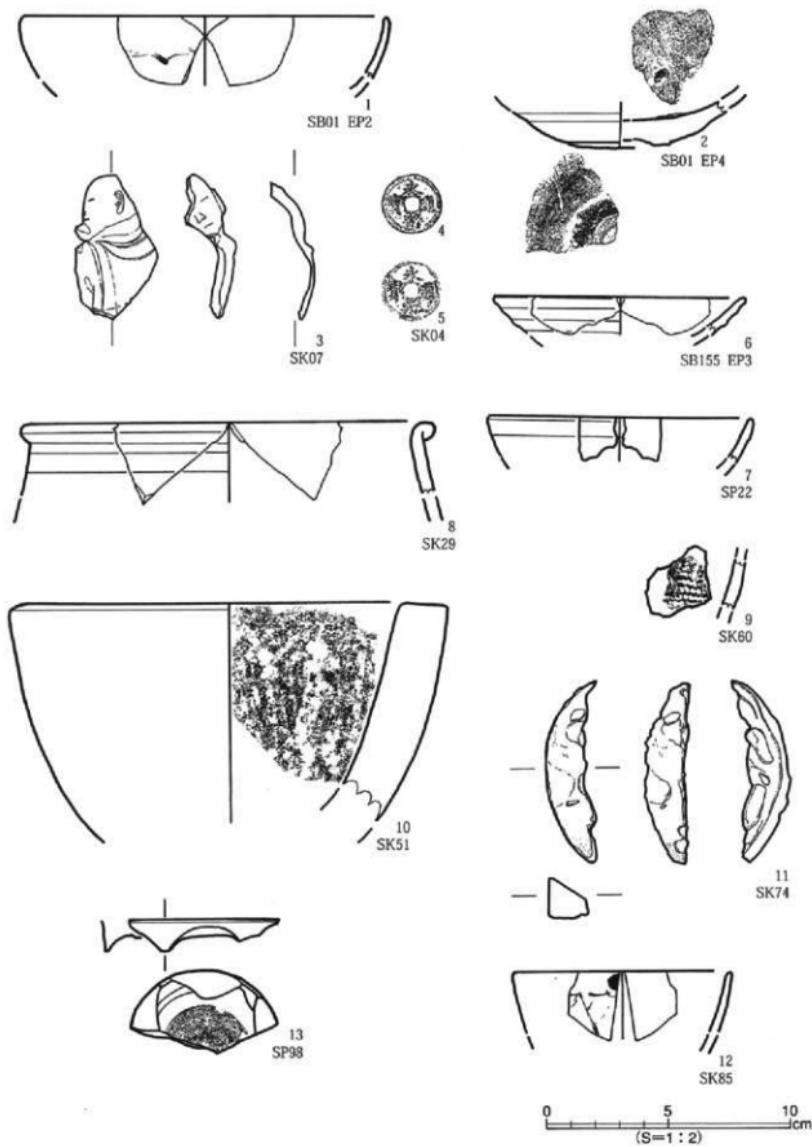
1は銅錢の寛永通宝。A-10グリッドI層より出土。新寛永に属し、背文字に「元」の字が見えるので、18世紀半ばに鑄造された可能性が高い。2も同様の寛永通宝で同グリッドより出土した。1より大きめで新寛永に属するため、17世紀後半遺構の所属時期を示すが、具体的な年代は不明。

3は在地産陶器小壺破片。口縁部周辺を欠く体部から底部にかけての破片で、全局の約1/4が現存する。体部上半までやや赤みがかる鉄釉が掛かり、内面は全面に施釉される。体部下半は露胎で底面に糸切り痕が残る。ロクロ成形。内外面とも釉薬の色が変化しており2次的に被熱した可能性がある。茶入れ等の茶道具の一種の可能性がある。4から6は染め付け碗破片で肥前系磁器である。出土位置は調査区表面採集遺物で詳細不明。4は胸部破片で外面に水文が施文される。5は高台部分の破片で高台外周に二重線が入る。6は口縁から胸部破片で外面一重綱目文が施される。口縁はやや端反りとなる。17世紀中頃に位置づけられる。これら遺構外出土の表面採集資料には、いわゆる初期伊万里に相当する染め付け破片資料が散見される。近世初期の17世紀以降の流通品が出土することから、いずれも本遺跡の所属時期に相当し、江戸時代を通じて村落が継続されていた様子を窺うことができよう。

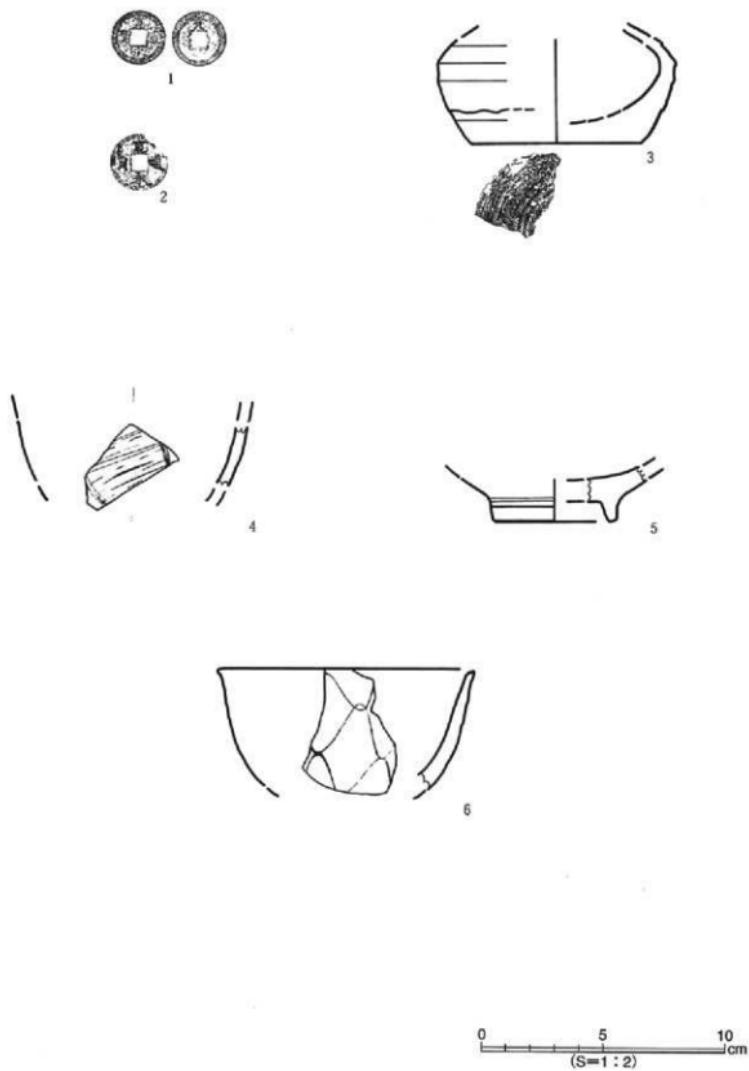
番号	出土場所	分類名	種類名	口径・最大長	器高・最大幅	底径・最大高	生産地	製作年代	備考	図	図版
1	SB01EP2	磁器	染め付け・碗?	(150)	(26)	—	肥前	17C代	鉢?	第20図1	図版9 20-1
2	SB01EP4	陶器	皿	—	(15)	42	唐津?	17C代	胎土目 被熱	第20図2	図版9 20-2
3	SK07	磁器	瓶?	(49)	(33)	(18)	瀬戸	19C~	地磁尊? 意匠	第20図3	図版9 20-3
4	SK04	銅錢	永楽通宝	Φ25	—	—	—	15C~	完形 5番と接合	第20図4	図版9 20-4
5	SK04	銅錢	永楽通宝	Φ25	—	—	—	15C~	完形 4番と接合	第20図5	図版9 20-5
6	SB155EP3	陶器	皿	(105)	(15)	—	瀬戸・美濃	16C~	—	第20図6	図版9 20-6
7	SP22	陶器	皿	(110)	(15)	—	瀬戸・美濃	16C~	—	第20図7	図版9 20-7
8	SK29	陶器	鉢	(170)	(33)	—	在地	不明	—	第20図8	図版9 20-8
9	SK60	鏡文	變・胸部	—	—	—	—	中期~	RL單節	第20図9	図版9 20-9
10	SK51	石製品	石鉢	(179)	(90)	—	在地	17C~	輪形	第20図10	図版9 20-10
11	SK74	金属製品	不明金属製品	74 (Φ100)	17	17	—	17C~	銅含有物	第20図11	図版10 20-11
12	SK85	磁器	染め付け・碗	(90)	(28)	—	肥前	17C後半	草木文	第20図12	図版10 20-12
13	SK98	陶器	桔梗台	(32)	14	—	在地?	19C~	窓道具	第20図13	図版10 20-13
14	A-10	銅錢	寛永通宝(新)	Φ22.5	—	—	—	18C中	完形 背に「元」	第21図1	図版10 21-1
15	A-10	銅錢	寛永通宝(新)	Φ24	—	—	—	17C~	一部欠損	第21図2	図版10 21-2
16	不明	陶器	小壺	—	(43)	(70)	在地?	17C~	鉄輪 体部下半露胎	第21図3	図版10 21-3
17	不明	磁器	染め付け・碗	—	(35)	—	肥前	17C中	水文	第21図4	図版10 21-4
18	不明	磁器	染め付け・碗	—	(22)	54	肥前	17C代	—	第21図5	図版10 21-5
19	不明	磁器	染め付け・碗	(105)	(51)	—	肥前	17C中	一重綱目文	第21図6	図版10 21-6

(カッコは推定・単位mm・Φは直径)

第2表 出土遺物一覧表



第20図 遺構内出土遺物実測図



第21図 遺構外出土遺物実測図

第5章 まとめ

1 遺構のまとめ

今回発見された遺構からは遺物の出土が限定されているため、遺構の所属時期等の推定には遺構の重複関係が重視された。その結果、3時期にわたる建物跡群を確認するに至った。最も古い時期にあたるSB155は基礎を伴わない柱穴による建物構造を示し、その後に基礎を伴うSB148へと変遷する過程が窺われる。重複関係より2棟は現時点ではかならずしも「建て替え」を示すとは言えない。ただし、建物跡に推定するに至らない柱穴が多数確認され、自ずと各建物に関連する可能性が高い柱穴が認識されたことからも建て替え・補修等は行われていた可能性が高いと思われる。もっとも、各建物跡はその規模等から性格（施設の役割）を明らかにする必要もあるが、調査区内に限定した範囲では全容を明らかにすることは困難であった。したがって、建物の様式と年代観についてのみまとめることする。

SB148・155は上限を16世紀代まで遡らせることが可能だが、周辺からの出土遺物の年代観から概ね17世紀を中心とした江戸時代初期の建物跡と推測する。これらの建物群の基準尺となる寸法は、SB148では桁間が約1間であり、SB155では梁間とした柱穴列間から1間6寸という寸法が得られている。後者は桁間でも約1間1~2尺で比較的基準尺に近似している。よって江戸時代初期の建物には1間=約1.8mの基準尺が機能したことが窺える。ただし、SB148では梁間が2間2尺5寸を測り、SB155などの規格性の強さが窺えないことが指摘される。一方、SB01は桁間・梁間とも大きく基準尺が異なることが窺える。ただし、梁間の2間1尺5寸はSB148の梁間に近似する傾向を示す。このことから、SB01・148はいずれも主柱のみの掘立構造物として類似性が窺える。しかし、SB01は柱穴に柱痕を残さないのに対してSB148では基礎礎を伴いつつ柱痕を比較的明瞭に残すなど相違点もある。もっとも現時点では建物構造物の種類については明らかにはし得ず、少なくとも柱穴の位置・数量等から堂宇建築である可能性は極めて低いものと推測している。

のことから、概ね出土遺物をもとにした年代観について、建物の構造からみた年代観とは概ね合致すると推測しているが、詳細については明らかにし得なかった。

その他、SD02の溝跡は人為的な遺構として認識した。ただし、堀跡といった機能を推定するには至らなかった。その根拠としては、堀上げ土による土壘状の構築物あるいはその痕跡を認めることができなかっただためであり、溝跡内部の堆積層にそれが反映されていると解釈した。そこで現時点では水利に関係する遺構の可能性を指摘したい。本遺跡周辺は棚田が発達した耕作地であり、かつそこには人頭大の礎による石垣や小水路があり、人為的な土地改良の痕跡が垣間見られる。SD02は他に検出した遺構群との重複関係もないため、同時期の可能性が高く水利をもととした地割りがあった可能性が指摘されよう。

2 遺物のまとめ

遺物は概ね16~19C代の遺物を中心として出土している。しかし、その大半は近代遺構の陶磁器が主体でありその詳細を明らかにはし得なかった。ただしその中には確実に17C代に生産された遺物も含んでおり、主体性を示す時期の一つとして近世初頭の遺跡であることが認識できた。肥前系磁器の流入は北前航路の開発に従って日本海側を結ぶ物流の促進化によりもたらされたと考えられる。歴史

的な経緯を元にすると、本遺跡周辺は必ずしも領主層が居住していた場所ではなく、近世村落に生活する一般的な領民の生活の場と言えるだろう。よって、これらの遺物はいわゆる領民により残された可能性を示すものと解釈されよう。

3 全体のまとめ

観音堂遺跡は、中近世の社寺関連遺跡として登録した。しかし、今回調査した範囲では必ずしも寺院・堂宇建築に係わる遺構が発見されたとは言えない。発見された掘立柱建物跡3棟と水利に関わる可能性の高い溝跡とは一体となる遺構群の様相を示し、近世村落の一部に相当すると考えられる。

そのなかでも、掘立柱建物跡を主体とする遺構群は、近世の建物建築に関する資料としては極めて重要な発見であったと考えられる。今後他の遺跡との比較検討を行うことで、当地域における近世村落の実態にせまる可能性が窺える。また、遺跡の広がりについては調査区の南北両面に広がることが予測されるが、いずれも現状の集落内の建物領域に重複する形が想定される。

註

(1) 阿子島 功氏（山形大学人文学部教授）に現地にて教授頂いた。

参考文献一覧

- 青田の歴史研究会 編 1979 『青田の史説』青田の史説刊行会 刊
 伊藤清郎 1997 『靈山と信仰の世界—奥羽の民衆と信仰—』
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
 山形市 2003 『山形市統計書 平成14年度版』
 山形市 2001 『山形市の環境 平成13年度版』
 山形市・東北芸術工科大学 2001 『山形市市街化調整区域 整備・保全構想策定調査報告書(資料編)』
 山形市 1999 『山形市都市計画マスター・プラン 地域別構想 滝山・藏王地区』
 山形市編さん委員会・山形市史編集委員会 1973 『山形市史 通史編』上巻 原始・古代・中世編
 山形市教育委員会 1990 『山形市の文化財』
 山形市教育委員会 2001a 『吉原I遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第10集
 山形市教育委員会 2001b 『吉原III遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第11集
 山形市教育委員会 2001c 『中野I遺跡 中野II遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第9集
 山形市教育委員会 2001d 『山形市埋蔵文化財調査年報 平成5~11年度』
 山形市教育委員会 2002a 『吉原VII遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第13集
 山形市教育委員会 2002b 『石田遺跡 上谷柏遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第14集
 山形市教育委員会 2003a 『吉原II遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第16集
 山形市教育委員会 2003b 『山形城三の丸跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第15集
 山形市教育委員会 2004 『吉原I・II・III・IV・VI遺跡・若宮の橋跡』山形市埋蔵文化財調査報告書第19集
 山形県教育委員会 1995 『分布調査報告書(22)』山形県埋蔵文化財調査報告書第195集
 山形県教育委員会 1996 『山形県中世城館遺跡調査報告書』第2集(村山地域)
 山形県埋蔵文化財センター 1999 『城南町一丁目遺跡』山形県埋蔵文化財センター報告書第69集
 吉田三郎・加藤啓他 1982 「表層地質調査」『土地分類基本調査 山形』山形県
 米地文夫・阿子島功 1982 「地形分類調査」『土地分類基本調査 山形』山形県

遺構番号	遺構名称/性格	発掘時期	グリッド	面積(単位:面積×面積)cm	遺構番号	遺構名称/性格	発掘時期	グリッド	面積(単位:面積×面積)cm	
SB01	孤立柱建物跡	19c代?	-	80×80×22	SK85	土坑/不明	近世~	A-7	68×53×15	
EP1	孤立柱建物跡	柱穴	A-18	68×67×20	SP86	小穴	不明	A-7	25×24×9	
EP2	孤立柱建物跡	柱穴	-	84×83×25	SP88	小穴	不明	A-7	36×33×6	
EP3	孤立柱建物跡	柱穴	-	84×83×25	SP91	小穴	不明	A-6	50×40×21	
EP4	孤立柱建物跡	柱穴	-	88×84×45	SP92	小穴	不明	z-5	(30)×28×28	
EP5	孤立柱建物跡	柱穴	-	80×75×29	SP93	小穴	不明	A-5	40×36×18	
EP6	孤立柱建物跡	柱穴	-	75×72×23	SP94	小穴	不明	z-5	35×35×14	
EP7	孤立柱建物跡	柱穴	-	78×75×37	SK95	土坑/不明	不明	z-8/A-8	87×(68)×22	
EP8	孤立柱建物跡	柱穴	-	81×69×34	SK96	土坑/不明	不明	A-7	60×64×21	
SD02	溝跡	近世	A-12	(600)×350×80	SP99	小穴	不明	A-6	24×24×11	
SK03	土坑/不明	不明	A-18	79×71×17	SP100	小穴	不明	A-6	22×20×8	
SK04	土坑/不明	16c代	B-18	103×97×21	SP101	小穴	不明	z-4	35×31×22	
SK05	土坑/不明	不明	B-18	94×84×26	SP102	小穴	不明	A-2	50×48×44	
SK06	土坑/不明	不明	B-18/C-18	110×90×30	SK104	土坑/不明	不明	A-7	74×(50)×30	
SK07	土坑/不明	19c代	B-17	98×97×38	SD105	溝跡	不明	A-5	(250)×50×20	
SK08	土坑/不明	不明	A-9	138×130×36	SP106	小穴	不明	A-7	28×26×6	
SK09	柱穴	不明	A-7	80×72×46	SP107	小穴	不明	A-4	22×18×25	
SK11	土坑	近世?	A-7	87×(32)×41	SP108	小穴	不明	A-4	28×25×15	
SK12	土坑/不明	不明	A-7/A-7	(102)×98×42	SP109	小穴	不明	A-4	34×24×11	
SK14	柱穴	不明	A-7	80×77×45	SK110	土坑/不明	不明	A-4	81×24×37	
SP15	柱穴	近世	A-6	45×44×10	SK111	土坑/不明	不明	A-4	70×46×32	
SK16	柱穴	不明	A-7	73×62×32	SK112	土坑/不明	不明	A-4/B-4	46×40×35	
SP18	柱穴	不明	A-7	48×42×12	SK113	土坑/不明	不明	A-4/B-4	54×50×22	
SK19	土坑/不明	不明	A-7	82×62×12	SK114	土坑/不明	不明	A-4	64×56×24	
SK20	土坑/不明	不明	A-7	69×60×9	SK116	土坑/不明	不明	A-5	53×32×12	
SK21	土坑/不明	不明	A-7	160×64×9	SP117	小穴	不明	A-5	26×22×12	
SP22	小穴	近世	A-7	42×42×20	SK119	土坑/不明	不明	A-5/B-5	(90)×48×61	
SK23	柱穴	近代~	A-6	98×90×30	SK120	土坑/不明	不明	A-5	70×40×22	
SK25	土坑/不明	不明	A-5	87×(50)×49	SK121	土坑/不明	近世~近代	A-5	(46)×40×17	
SK27	土坑/不明	不明	A-5・6	120×78×56	SP122	小穴	不明	A-4	21×20×17	
SK29	土坑/不明	不明	A-6	90×86×39	SP123	小穴	不明	A-4/B-4	40×32×9	
SK30	土坑/不明	不明	A-6/A-6	(90)×(60)×35	SP124	小穴	不明	A-4	34×24×12	
SK31	土坑/不明	不明	A-3・4	94×77×45	SP125	小穴	不明	A-4/B-4	36×24×12	
SP32	柱穴	不明	A-6	36×30×44	SP126	小穴	不明	A-4	30×20×12	
SK33	土坑/不明	不明	A-5	170×94×68	SP127	小穴	不明	A-4	21×20×7	
SP34	柱穴	不明	A-6	23×22×16	SP128	小穴	不明	A-4	28×(16)×15	
SP35	柱穴	不明	A-6	34×30×40	SP129	小穴	不明	A-5	28×18×18	
SK37	土坑/不明	不明	A-6	80×(36)×34	SP130	小穴	不明	A-5	60×28×22	
SP40	柱穴	不明	A-6	27×24×33	SK131	土坑/不明	不明	A-5	86×(21)×17	
SP41	柱穴	不明	A-6	40×30×8	SK135	土坑/不明	不明	A-2	64×52×27	
SP42	柱穴	不明	A-5	28×28×26	SK136	土坑/不明	不明	A-2	56×52×38	
SK43	柱穴	不明	A-4	92×80×55	SK137	土坑/不明	不明	A-2	44×40×29	
SP44	小穴	不明	A-7	30×29×18	SK138	土坑/不明	不明	A-2	68×34×25	
SK45	土坑/不明	不明	A-7	(106)×96×15	SK139	土坑/不明	不明	A-2	60×42×17	
SP46	柱穴	不明	A-6	50×(26)×55	SK140	土坑/不明	不明	A-1	88×60×25	
SK47	土坑/不明	不明	A-6	113×110×72	SK141	土坑/不明	不明	A-1	108×90×30	
SK51	土坑/不明	近世~近代?	A-4	92×84×31	SK142	土坑/不明	不明	A-1	53×48×33	
SK53	柱穴	不明	A-4・5	80×63×38	SK143	土坑/不明	不明	A-1	104×65×21	
SK54	柱穴	不明	A-5	118×80×40	SK144	土坑/不明	不明	z-0・1	74×70×18	
SK55	土坑/不明	不明	A-5	100×(94)×51	SK145	土坑/不明	不明	A-1	40×30×10	
SK56	柱穴	不明	A-6	126×55×53	SK146	土坑/不明	不明	A-1	108×90×26	
SP68	柱穴	不明	A-5	48×42×15	SK147	土坑/不明	不明	A-1	50×32×13	
SP59	柱穴	不明	A-5	68×45×32	SP148	孤立柱建物跡	17c代?	-	-	
SK60	土坑/不明	不明	A-5	98×(42)×41	EP1	孤立柱建物跡	柱穴	-	90×84×47	
SK61	柱穴	不明	A-5	70×50×47	EP2	孤立柱建物跡	柱穴	-	110×90×58	
SK63	柱穴	不明	A-6	(70)×53×20	EP3	孤立柱建物跡	柱穴	-	z-6/A-6	80×74×60
SK64	柱穴	不明	A-4	95×50×32	EP4	孤立柱建物跡	柱穴	-	108×60×52	
SK66	土坑/不明	不明	A-6	90×(42)×35	EP5	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-6	84×83×60
SK67	土坑/不明	不明	A-4	80×45×19	SP149	土坑/不明	不明	A-6	88×40×20	
SP64	柱穴	不明	A-4	33×28×27	SK150	土坑/不明	不明	A-7	72×34×32	
SP71	柱穴	不明	A-3	38×26×30	SK153	土坑/不明	不明	A-3	70×52×26	
SK72	柱穴	不明	A-3	90×30×40	SK154	土坑/不明	不明	A-3・4	73×60×32	
SK73	柱穴	不明	A-3・4	62×60×38	SB155	孤立柱建物跡	16~17c代	-	-	
SK74	柱穴	近世~近代	A-3・4	80×66×37	EP1	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-6	104×74×62
SK75	土坑/不明	不明	A-6	110×88×73	EP2	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-6	116×79×69
SK76	土坑/不明	不明	A-5	80×64×36	EP3	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-6・6	91×76×51
SK77	柱穴	不明	A-5	88×38×36	EP4	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-6・6	128×(36)×54
SP78	小穴	不明	A-3	31×30×32	EP5	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-5	82×80×51
SP79	小穴	不明	A-3	33×30×15	EP6	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-5	103×61×52
SP80	小穴	不明	A-4	30×28×27	EP7	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-4・5	144×79×47
SK81	土坑/不明	不明	A-6	80×38×34	EP8	孤立柱建物跡	柱穴	-	A-5	(100)×60×32
SK84	土坑/不明	不明	A-6	66×50×7	SK156	土坑/不明	不明	A-2	(94)×74×32	

第3表 遺構一覧表

報告書抄録

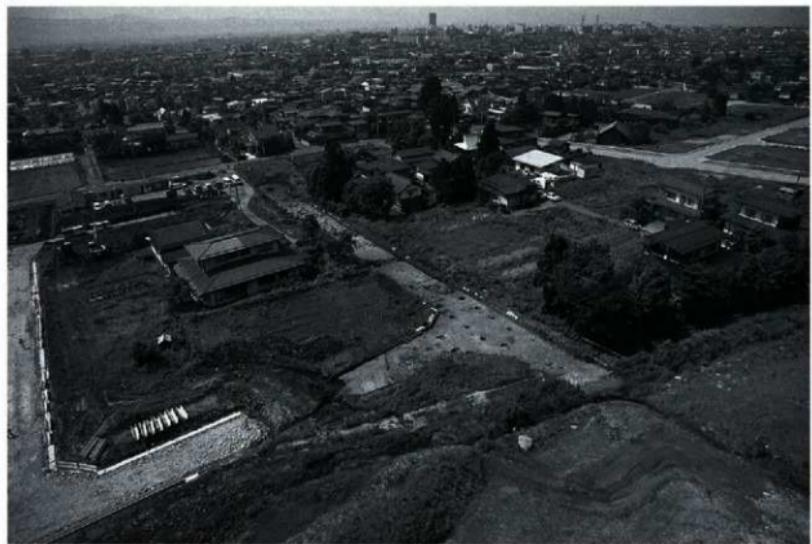
ふりがな	かんのんどういせき							
書名	観音堂遺跡							
副書名	山形市芸工大前土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	五十嵐 貴久							
編集機関	山形市教育委員会							
所在地	〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 TEL 023-641-1212							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんのんどう 観音堂	やまがたけん 山形県 やまとがたし 山形市 おおあざあおた 大字青田 あざなかた 字仲田	6201	平成11年度 登録	38度 13分 32秒	140度 20分 32秒	20000515 ～ 20000623	1,200m ²	山形市 芸工大前 土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
観音堂遺跡	散布地 集落	縄文時代		土器				
		中世末～近世	掘立柱建物跡3棟 溝跡 柱穴 土坑 小穴	土器 陶器 金属製品 古錢 石製品				
								総出土箱数1箱

写 真 図 版

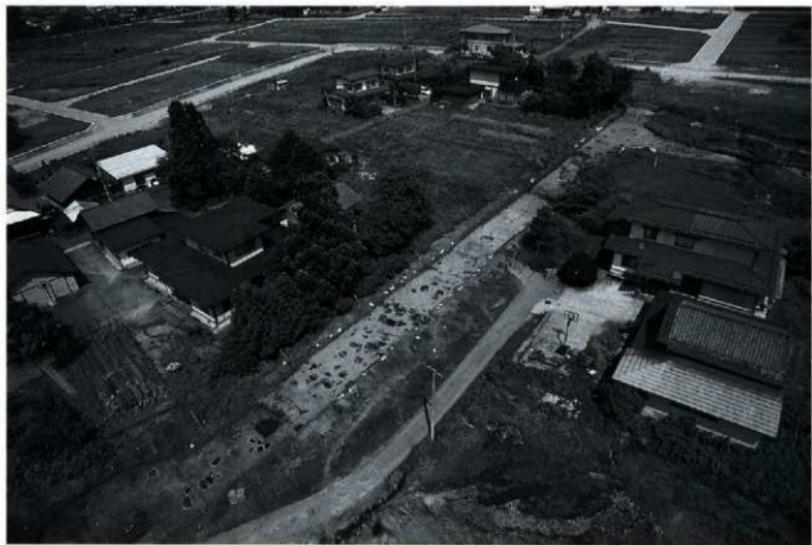


調査区全体（上が東）

図版2



調査区全景（西から）



調査区全景（南から）



SB01全景（南から）



SB148・155全景（西から）

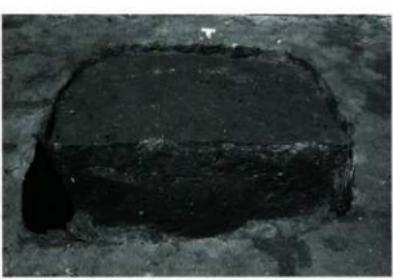
図版 4



SD02完掘状況（西から）



SD02断面写真（南から）



図版 6



SB148EP 2・SK14断面（南から）



SB148EP 2 断面（南から）



SB148EP 1・SK11断面（西から）



SB148EP 1 碇盤礫（北から）



SB148EP 1・EP 2（東から）



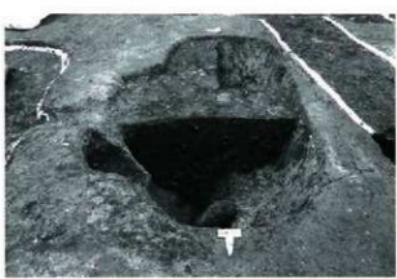
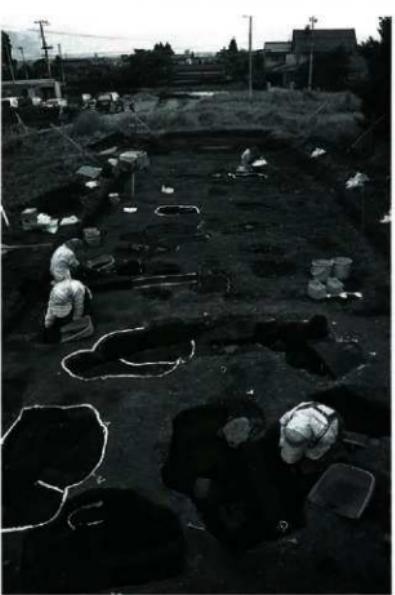
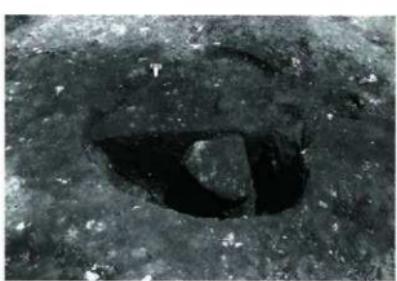
SB148EP 3・EP 4（東から）



SB148EP 4・EP 5（東から）



SB148EP 5・SK23断面（南東から）



図版 8



SK14断面（南から）



SK43断面（南から）



SP59断面（南から）



SK61断面（南から）



SK16断面（西から）



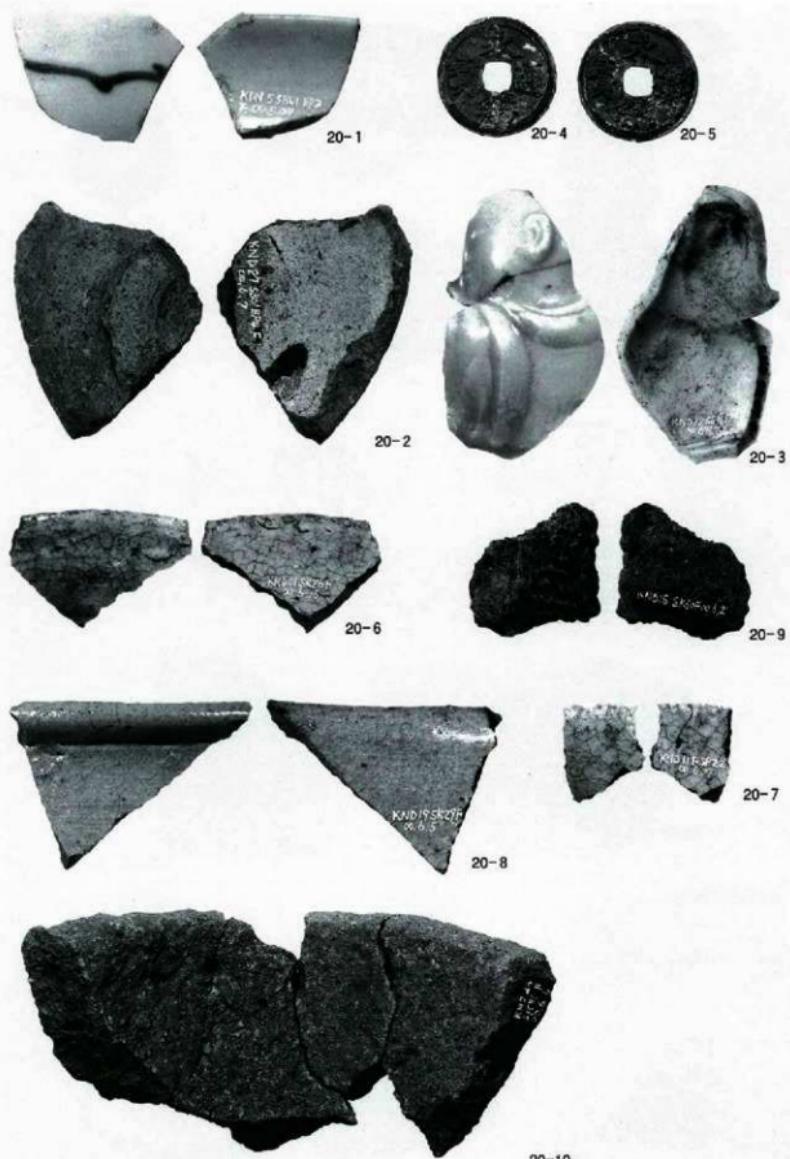
SK04調査状況(南から)



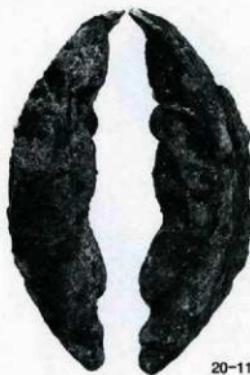
SP22断面（西から）



SK07断面（西から）



遺物（1）(10: S = 1/2、他は S = 1/1)



遺物 (2) (S=1/1)

山形県山形市埋蔵文化財調査報告書 第20集

観音堂遺跡

山形市芸工大前土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

2004年3月31日 発行

発行 山形市芸工大前土地区画整理組合

山形市上桜田200番地

023-631-1400 〒990-2421

山形市教育委員会

山形市旅籠町二丁目3番25号

023-641-1212 〒990-8540

印刷 株式会社 大風印刷

山形市藏王松ヶ丘一丁目2番6号

023-689-1111 〒990-2338
